

月刊

馬場唯一のコミュニティマガジン

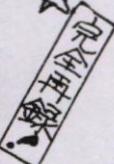
恒河沙



☆ 駒場祭自主制作映画批評

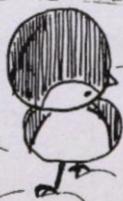


「若者論」に異議なし?



駒場祭討論会

— 廣松渉氏を迎えて



No. 9

言 頭 卷

葉が土に埋もれ 腐った土となり 重みを耐え
るうちに ひとかけらのけれどももう決して割れ
ぬ石となるように

あなたにとって 今深く沈むということも 意
味のあることかもしれない。

目次

巻頭言

特集 駒場祭をふり返る

駒場祭の印象

雨後野筒男

何かが違う…

江古野実

駒場祭痴漢行状記

兼平義仁

駒場祭初参加体験録

今城健晴

第一歩としての駒場祭

得丸公明

☆駒場祭自主制作映画評

駒場祭における自主映画について

魔界詩人

駒場祭に見られた学生映画の情況(1)

宮台真司

人物クローズアップ

コラム 時代錯誤家

ああ夢のカリフォルニア

41

17

4

1

お断り:今回「今、再び東大を問う」書評
はお休みします。

「若者論」に異議なし? 18

討論会誌上再録

恒河沙一周年特集 42

サークル自己紹介 応援部 山岸智子 40

「私の主張」 鈴木都政に反撃を 静田秀光 51
東シ環境アセスメント条例期成同盟

前人魚のうた 人魚のうた 穉沙 48

クロスワードパズル解答 52

読者から 50

クロスワードパズル 53

編集後記 54

クロワードパズル解答用紙 55

恒河沙に対する意見を書く用紙 56

駒場祭を、ハリ返る

第30回駒場祭も終了しました。ただ漠然と小り返ればいつもと同じ祭りが終わっただけとも見えます。けれどもおそろくそうではないと思つたのです。駒場祭は自分が作つたのですから。

一体どんな祭りを私たちは創つたのか。それを、とらえ返したいと思ひます。

駒場祭の印象 雨後野筈男

駒場祭 雨で割ったら ドロリカン

どうしてあんなに雨ばかり続いたのかねえ。僕はぜんたい、じめじめした天気になると、すぐに憂鬱になる男だから、この駒場も例外なく憂鬱だった。

だいたい、意気阻喪させられるようなこと多すぎよ。民音は毎日毎日、「青解が来た、青解が来た。」って叫びまわってるしね。じめじめしてムックくる地下鉄の電車乗りついで、「また今日も雨がなんて憂鬱になって駅の階段降りてくると、またまた今日も、「あ

の殺人集団解放派が……なんて、朝っぱらからガンガンかなりたててるんだからね。校舎にも入らんうちに、憂鬱というか疲れというか、アキレというかシラケというか、感じないではないられないよ。まあがマンして、中へ入ろう。僕らの企画は一本にあってただ、ど一本は、まず正面の入り口からして見てられないね。すだれ、とかのれん状のものなんだけど、雑巾で言った方がまだ近い。ワラ半紙に刷った方々のビラが、そう見た目もよくないのを、同じ場所何枚も、じゅずつなぎにしてぞろぞろぶら下げてるんだよ。まったく美的でなくて、触るのがやんなっちゃうね。(触らないと通れない)壁にはトコロかまわず貼りつけて、おまけに地べたにまで貼ってあるやつが、この雨の中、ドロくつに踏みあらされてぐちゃぐちゃになってるんだよ。

銀杏並木なんてそれどころじゃないよね。あれだけの人数にふく

れ上った駒場の人間が、あの泥の中、ひっかき回していくんだからね。やきそば作ってるおにいちゃん、舗装もない泥の上、客引きやってるかわいらしいおねえちゃんも、腕をつかまれてニヤける(ぞと)する? おにいちゃんも、足はドロだらけ。どっかの難民じゃあるまいし、あんなところでももの食うなんて、正常の感覚とは思えないよ。だいたいのところ、食いもの屋は暗くて、じめじめして、寒そうで、きたならしかった。

あの足でまた校舎に入っていくんだからもう極致だね。まあ泥の事はこらへんにして、屋内企画のことについていえば、これもあんまりパツとしなかった。例えば女の子の反応なんか見て思うけど、いわゆる「おふざけ企画」に彼女は、「東大生でもこんな面あるのね」と喜び、また一方では安心し——これはどうもギマンの臭いがする——今度はいわゆる「マジメ企画」には、初めこそ(やっぱ)東大生ってすごいよね」と尊敬のまなざしを示しながらも、説明を聞くうちに、どうも心はついてゆかぬ、といった様子で——彼女の認識が足りぬとも一概にいえぬように思うが——かくして「マジメ企画」には、一部の熱心な(敬して遠ざけるべき?)女の子だけがくるということになる。「マジメ」なのはわかるけど、あんまりサエない企画も多かったし、本人が意識してるかどうかは別に、「僕はこんなことを考えます」なんて雰囲気感じちゃうと、誰だろて鼻白むよね。

ケチばかりつけたけど、本当のところ、僕らのやった企画こそ、自分にとってはいちばんむなしかったのだ。マジメとバカの弁証法的発展(のただの妥協)をはかるうと、考えだしたのが、いつてみれば、週刊紙の実態レポート風の発表だったんだけど、たったの二日間で徹夜した未出果上が、たのは、側で立ってて赤面したくなるような奇怪な代物。ところがこれが駒場祭中の三日間、大入り満員の大盛況だったのだから、もう世も末だ、たわけ。

てなわけで、「ドツボに救いはあるか」どころではない。この三

日間を中心とする何日かこそ、まさにドツボの極であって、それが以上の、くだらないケチつけの「心理的背景」なのである。だから気にしなくていいよ。

パツとしない企画はやっぱり多かつたけれど、結構よかったものもいくつかあったのは知っている。やっぱり創造性とか「出会い」とか、ひらめきとか、そんなものをちよつとでも感じるものはいいいね。恒河沙の結構よかったですよ。(オベッカ)

以上でおわりのつもりだったんだけど、先日、クラスの方が殴られたから書いとく。駒祭でもそう思、たけど、解放派の奴ってのは全くセンスないね。だいたい、何考えてんのか全然わかんないよ。おまけに、あたりかまわずわめきちらすし、なぐりちらすなんてのは、集団ヒステリーも(パラノイア)だったけ? いいとこじゃないのかな。二本を占拠してたマイクのがなつてた文句がまた笑止千万で、民青に連れられて抗議に来た学生達に「創価学会・生長の家」と同じだなんて、何度も繰り返してんだよ。どうして同じだって、説明してくれりゃ、そりゃわかるかもしれないけど、それ繰り返してんのしか聞こえないもんね。殴られた奴は全然民青じゃない。僕だって、セクト・思想嫌いもいとこだからね。それでも民青のいやらしいアジに耳ふさいで出ていったんだし、そういう奴はいっぱいいいたんだよ。そこをわかってくれなくちゃあ。

それで思い出したんだけど、何日目だったか、スピーカーガンガンにアジってる正門前の解放派抗議集会の、脇の屋外ステージで、これまたボリュームいっぱいに鳴らしてたバンドの演奏。どこの団体だか何の曲だったかわかんなかったが、あれは本当にうまかった。ボーカルの女の子が抜群にいい。あれに今回の一等賞を捧げることにしたい。僕と友だちはアジそっちのけで聞きほれていたのだから。

何かか違ふ… 江古野 実

「おい、危ないからカサをつぼめるよ。私の隣りにいた見知らぬ人が、多少非難をこめた口調で言いました。駒場祭二日目の夕方、降りしきる冷たい雨の中、第二本館前での集会の時のことです。

衆知のとおり、駒場祭前日、解放派が明寮の一室をバリケード封鎖し、その後233教室に立て籠もったわけですが、それに抗議する集会在駒場祭中も連日雨かれました。私は、大学の一構成員として「大学自治を守るために」全学友、教職員と団結して闘いぬこうという固い決意のもとに集会やデモに積極的主体的に参加し、行動した、のではなく、事態の推移をとにもかくにも自分の目で見届けておきたい一いつまり早い話が野次馬根性から、その集会に参加していました。

「カサをつぼめる。」といわれてまわりをみわたすと、カサをさしているのは私のほか数人だけ。二本入口前の狭い空間をぎっしりとうずめつくしていた40名余の学友は、雨も寒さも何のその、自治会執行部の指揮にあわせ、シユプレヒコールをあげていました。「解放派は直ちに出ていけ!」「暴力集団は駒場祭に無用だ!」「我々は団結して闘うぞ!」多くの学友にとって、その場の「熱い連帯」が、寒さや雨を忘れさせているようでした。しかし、私はそうではなかった。何か心にひっかかるものがあった、その場の「熱い連帯」を共有できませんでした。何かが違う…!

まず、集会の発言やシユプレヒコールで繰り返される「殺人者集団」「気がいらい集団」「血も涙もない冷血集団」という文句。ここにあられれているのは、彼ら解放派を「狂人」「自分とは別種の、得体の知れない集団」としてとらえる視点ではないでしょうか。彼らは生まれつき解放派だったわけではもちろんなく、我々と同じように、

笑ったり泣いたり怒ったり悲しんだりしながら生きてきたはず。そして、おそらくは、何かを契機に社会の矛盾を感じ、社会変革の方法を模索する中で、たまたま最も身近にあった(例えは高校の先輩に解放派の人がいたとか)結社である解放派に身を投じ、思想としてはマルクスレーニン主義(解放派流の)を正しいと信じるに致ったのでしよう。凄惨な内ゲバは、たしかに我々の常識をこえるものですが、それも、彼らが、彼らの言うところの革命の思想と方法にあくまでも忠実であろうとする帰結としてある悲劇としてとらえなければならぬのではないのでしょうか。内ゲバの内題は、私たちが何らかの思想を正しいと判断し、行動しようとする時、まさに私たち自身の内題としてある。…話が横道にそれましたが、つまり私の言いたいのは、彼らも我々と同じ人間であるということ、そして、彼らが人間として苦悩し、思索する中で選びとったひとつの考え方を行動に對し、我々が同じ一人の人間として彼らの考え方を、行動を判断し批判するのであって、我々が批判するのは彼らの人格ではないということ、です。

第二に、ヘルメットやマスクといういでたち自体が嫌悪の対象となっていることを思わせる発言や、果ては「C自治という変な名前前の団体」といった発言が飛び出すなど、文字通り「坊主僧けりや袈裟まで憎い」という雰囲気。

さらに、「駒場祭を守れ」というスローガン。「日頃のクラス、サークル活動の成果を発表する場」としてある駒場祭は理念としてはその通りでしようが、その実態が理念からかけ離れていることは、皆さん御存知の通り。少なくとも私にとって、「解放派の暴力から駒場祭を守れ。」と言う時には、気恥ずかしさとためらいが併います。

以上の断片的体験をつなぎあわせ、私なりに今回の行動の問題点を整理すれば次のようになります。

解放派が駒場を内ゲバの出撃拠点化しようとしたことは事実です。それに抗議した学友になぐる、けるの暴行を加えたことは許し

がたいと思います。もちろん、ある暴力行為の是非を、暴力行為の前後の具体的状況から切り離して論ずることはできないわけですが、そのことを考慮しても、彼らの暴力を正当化する要素は何もありません。それゆえ、彼らの暴力に反対して行動が組まれるのはもっともなことだと思います。しかし、問題は「暴力反対」があまりにもっともすぎることにあります。「暴力反対」に正面切つて反対する人はほとんどいません。なぜなら、人間誰しもならぬれば痛いのですから。ここにおとし穴があります。我々は「暴力反対」という錦の御旗に、さしたる思考を経ずともよりかかることができず、いざ我々が「錦の御旗」によりかかり、自らの行動の正当性の根拠を「暴力反対」に尋ねてしまふ時、我々自身の内省はストップし、自らの行動・考えを絶えず検証し、とらえかえしていく思考回路は断たれてしまいます。かくして「暴力反対」の大義名分のもとに、我々の行動のすべてが正当化、合理化されるという憂うべき事態にまで至る可能性さえ生じるわけです。

今回の行動に即して、より具体的に言えば「暴力反対」で一致して取り組まれたはずの行動がひとり歩きし、「得体のしれない集団」「気味がいい集団」排除という、少数派切り捨てにつながる批判されるべき感情までが動員・正当化され、学友を組織するひとつの有力な要因となつていたのではないのでしょうか。また「解放派から駒場祭を守れ」というスローガンを叫ぶ時、本来理念としてある「クラス・サークル活動の成果を発表する場としての駒場祭」が、すでに実体としてあるかのような錯覚が生じ、数々の内題点がある実態としての駒場祭の神格化・物神化さえおこつてしまふのではないのでしょうか。我々が駒場祭をなぜやるのか、我々がある企画をやる時、我々自身がその企画をやる内的必然性、自らの生活の中での位置づけを向う思考は、何回「解放派から駒場祭を守れ」と唱えてみても開始されないのです。

多少いや大いに論理が混乱しましたが、つまり、我々が「なぜこ

の行動を行なうのか」という論理とその論理の正当性が、大衆的に確認されないまま「学友の団結の力で「駒場祭を守りぬいた」という幻想にひたる時、我々は「天王をしたこと、抗議行動をしたこと、それ自体が意義のあることかのごとく考え違いをおこし、その行動へ参加したことだけをもち、自らを「大学自治を守る、民主的人間」と安直に規定してしまい、自らの駒場祭への関わり、さらには大学自治への関わりを問おうとはしなくなるわけです。

誤解のないように言っておけば、私も暴力には反対します。理由を詳しく論じる時間はないのですが、簡単にいえば、人間がお互いに意見を交換し、批判しあふことにより、共に自らを高めていく、という関係が断ち切られてしまうからです。さらに、バリケード封鎖や占拠によって自らの主張を認めさせることに、も原則的には反対します。(ただし、「人民の抵抗権」という考え方にはついては保留します。)自らの主張が多くの人々に受け入れられないのは、自らの論理の不充分さにあると絶対すべきであり、「占拠によって主張をつきつける」という考え方は、ひとりよがりのそしりを免れないと思います。

駒場祭についての感想を、という編集部の特請とは似ても似つかないものになってしまいました。最後に二つほどつけたしを。

まず、今回の行動に非主体的な参加しかしなかったことを深く反省します。「お前は、学友がなぐられようとしている時、身をもってそれを阻止しようとしなかったではないか」という批判は甘んじて受けなければなりません。この批判に答えるかどうかは、私自身のこれから後の行動にかかっていると思います。

第二に、私自身、解放派を「得体のしれない、うす気味悪い集団」としてとらえる視点を少なからず持っているということ。たまたま、私は彼らと話をしたことがあります。正直言って、早くその場から逃げ出したかった。こういう弱さを克服していくことも、これからの課題だと考えています。

臆病で気弱な私が、ここに述べた通りに行動できるのかどうかは
心もとないのですが……。みなさんからの批判をお待ちしています。

〔78〕Ⅱ

駒場祭痴漢行状記 兼平義仁

「ギャー！」
絹を裂くような女子高校生の悲鳴。

「チカン、私の胸さわ、たア」
一勢に振向く顔、かお、カオ。

「ミラして曇り空の下、例のイチヨウ並木のド真中で僕は痴漢とし
ての第一歩を踏み出した。

「あのヒト、私の胸にさわったア」

「エッ、ホ、ホ、ボク知りません……」

「ウソオ、さゆったじゃないー（泣声）」

「アంతちよと待ちなさいヨオ」
と連呼の同じく女子高校生。

「エ、そんな？…ホク何もしてませんヨオ、手を離して下さい
よう」

七三に分けた髪に、黒縁メガネ。茶色のフーサーをきっちり着込
んで、小脇には法学書という、一見……いや十見くらいいてもマジメ
学生風に見える。今日このホク、その僕と相手の女子高生役の3
人による真逆の演技は続く。周囲は、何事かと見守る模擬店の者や
マズクナと通り過ぎる良家の子ならしき方々に混じって、サクウか
数人。今ひとつ野次馬が足りないな、などと思、ていざとこころへ
現れたのは、紛れもない正義の味方東大生トリオ。あまりのタイミ
ングの良さに、最初はサクウかと思、た程だった。本物と判明す

るも早速予定を変更して、この3人を巻込んでやり合うことにする。
ワロクエる僕に、彼らからは唇敝なく言葉が浴びせられる。

「あやまれよ」
「でもボク、本当に何もしてないんです」。

「何言ってるんだ、二人がさわった、って言ってるんじゃないか
「ただフツカ、ただけですよ」

「いいから、とにかくオマエがあやまれば済むんだから、男らし
く頭を下けたらどうだ」

「ミラ、って押し問答をしているうちに、次第にこちらは劣勢にな
てくるし、周囲からは「ヒックリカメラじやないのか」もどという
ミラケた声や、冷たいツメタイ視線が浴びせられ始めた。

「エエ、僕は用意しておいた、特大生協ハッジ」（例のイチヨウ
のマークの入った緑色のヤツで、マタンキハッジを御存知の方は、
あれを思い浮かべたい）をふりかざして見得を切った。

「エエ、黙れ黙れタマシエイ、このイチヨウのマークが目に入
らぬか」

と、アレレ、東大生トリオにはらい膝はされた、特大生協ハッジ
が虚空を舞う。彼らにしこみりや、ここままでマジにつきあわせれ
ちやあ引くに引けない、ワケらしい。ハッジを捨ててもう一度見得
を切る。

「オマシラ、このワシを東大法学部と知って、この狼藉か、頭か
高いゾ」

「それがどうした」

「セー、コリヤ冗談か通じんワイ……」

困惑しながらも、再び見得を切る。我ながらしつこい。しかし、
あれこれ苦勞してこの街頭劇を終結させようとする我々に対し、
まるで死者にムチ打つかのごとく非難が浴びせられ始めた。「商売
の邪魔だ」。「どっか他所でやれ」。「迷惑だ」エトセトラ、エ
トセトラ……いすれも模擬店からの声だ。

何てこった。当然、K.F.の方から出ると思った昔情が、駒祭の大
半を占める模擬店からアツけられるとは、やはりサクフであるK.F.
役が我々を連れ去るが、最早劇どころではない。「早く連れ去れ
」の声か耳に残った。

そ、そうだったんぞすね……駒祭ってのは金儲けのための行事だ
ったんぞすね……いかに効率良く稼ごうかが最も重要であつて、予定外
のハプニングによる秩序の乱れは、決して決して許されないのぞし
ようね……そういへば昼間、から酒飲んでるヤツも居なかつたし、
ハカをやる者も居なければ、それをアオリ立てる者も居ない。皆様
ただひたすら商売に励んでいらっしやる……何と誰か真直な「祭り
」であることよ。

いやー、オモロクナイねオモロクタイムカード押したような
祭りはオ・モ・シ・ロ・クもないのですよ、オノマア今回の痴漢、こ
は失敗に終わったけれども、来年は、もう来年こそはも、とシツチャ
カメツチャカむな祭りにしたい、二人……もうアナタもいいし
オミもいいし、誰かそんなヤツはおらんかネク。

(劇団黙ッ更は明大生)

駒場祭初参加体験録

今城健晴

現在、大海を小舟で渡りきり、食糧豊富な陸地へ到達したが如き
感じである。心地よい空堵感と虚脱感が交錯する中、早くもあの充
実した日々がなつかしくなってきた。それにしても「あさってまで
に五枚書いてくれ」とは恒河沙のメンメンも我々と同じく、計画は
遅れるもの、という例外なき法則に支配されているのか、と少々空
心と同情。

さて、我クラスが自主映画を制作するという事に決定したのは

七月でわりには早かつた。そして案々完成して、余裕をもって駒祭に
臨む計画だったのだけれど、前出の例外なき法則により、撮影が完
了したのが駒祭の二週間前、録音その他全てが終了し完成したのは
当日の朝七時であつた。あの日、心地よい疲労感が全身に漂う中、
監督のM君の家でいただいたコーヒーの味は、一生の記念すべき味
わいとなつた。

夏休み直前のクラス合宿で、私はこの映画作りの中へ飛びこもう
と未意した。高校時代、野球部で毎日泥だらけになり、文化祭も毎
年積極的に参加し、模擬裁判などをやった自分として、何のサーク
ルにも属せず、大学時代を通り過ぎるのは、あまりに空虚でむなし
いと切実に思つていた矢先であつた。けれど映画制作に関して私は
全くのズブ素人で一抹の不安はぬぐい切れなかつた。それはすぐ現
典のものとなつた。事前に希密に話し合い、M君と私が夫々脚本を
書いてきて、そのうちどちらかを採用していく、ということだった
のだけれど、私が書いたものは、てんでダメだった。しゃばらせ遺
ぎなのである。まるで小説、画面の重要性というものを過小評価、
いやほとんど頭になかつたと言つても過言ではない。それでM君の
脚本に基いていくことになつた。ところがである。その脚本という
のは四分の一くらいしかできていなくて、脚本書きと撮影が同時に
進行していく、すなわち前日にM君が書いたところを翌日役者に見
せてそれで撮影するという細渡りの進行である。一度その状況に破
綻がおきて、皆がマージャンをやっている様でM君が脚本を書くこ
う一幕もあつた。監督に過大の負担がかかり過ぎたことは助監督
である私の未熟さと怠慢によるどころが多く、全く頭の下がる思
いである。

撮影がなんとか終了し、録音にはいつたがこれが又くせもの、と
にかく神経のすりへる毎日が続いた。夢の中で山盛りのテープに追
いかけられることもあつた。講義が終わるとM君の家へ直行、終電で
りぎりまでねばり、タクシーに五人つめこんで渋谷までずっどばし

帰る。そして前日ま徹夜で朝七時の完成。万才を叫ぶ気力もなし、放心というのはいかようなことを言うのか、と実感。

当日は機械の機嫌が悪く、少々のトラブルはあったが、まあ成功で観客の感想も面白かった、よくできていた、というのが多くうれしく思う。

常に高度な完璧さの追求とタイムリミットとの接点を模索しつつの戦いであった。全く、他の映画を見る時の感覚、視点が一变してしまつた。

さて、クラス企画ということ、理想的なのは全買模倣店が、映画に拘めるということだけれど、現実にはそうはいかない。やはり勉強一筋という人もいて少々腹たたいけれど仕方ないか。それならそれで、ノートまコピーして回してくれるぐらいしてほしいというのが本音。けれど容易に他大学から女優を連れてくるということにはせず、全てクラス人員を仕上げた、というところは胸を張りたい。女性をたくさん使えばいいじゃんこもんじゃありませんよ、映画は。

駒祭全般に關して言えば、やはり解放派や革マル派による混乱があったのが誠に遺憾である。クラス・サークルが団結して尽力し、盛り上げてまいこうとしているのに、ああいった行爲によって全体が迷惑するのは本当に腹立たしい。でも警察権力の介入なしに、一般学生による学内の団結により駒祭が維持されたことには最大級の賛辞を贈りたい。

それから駒祭前後の講義について。やはり前々日くらいから全面休講にしてほしい。さらに後片付け、残務処理などに二日間は休講にしてほしいと思う。教官方は駒祭など遊びなのだからそのために一週間も空白を作るのはもつての他、そのエネルギーを勉強に費してほしいと思つてはいるかもしれないが、断じてそれには反対したい。大体他の団体と交渉したり、種々の用意のために外部と連絡をつけたりという、一つの仕事をやりとげるといふ作業は、社会人とむす

ための必須の重要な体験であり、教室でノートを取つていただけは得られない貴重な経験のはずだ。私の聞いたところでは、今は昔とちがつてある一つの仕事を担当するプロジェクトチームが最初から最後までその仕事に対して責任を持つという風なしくみに変わつてきているそうだから、年に一度くらい教室から離れたところで、ある事業の完成に責任を持ち万全を期すという体験のために、一週間くらい休講にするくらいかえつて必要じゃないかと思う、一考を要してほしい。

最後に一言、映画はスタッフよりキャストが楽。来年はキャストをやるぞ。主役じゃ主役じゃ。キャストは顔ではない。演技力だ、となぐさめつつ。
(547E)

第一歩としての駒場祭

得丸公明 (GRUBB)

<10>

我々、GRROUP、アフリカと日本は、今回駒祭に初めて参加をした。内容は、講演会・シンポジウムを三日間行なつたほかに、反アパルトヘイトを訴える映画の上映、アパルトヘイト体制の現状を示す写真、パネル、詩集の掲示であった。

我々のグループは活動の歴史が浅いため、名前すら多くの人々に知られていない状態である。そこでまずグループの結成の目的、契機について一言述べたい。

「アフリカ」という言葉を聞くと、動物、砂漠、ジャングルなどを連想する人もいと思うが、一番大切なことは、アフリカでは人間が生活しているということである。それはどこでもおなじだ、と思うだろうが、そのとおり。でも日本では、このことはあまり認識されてないと思う。

その人々は、近代ヨーロッパの帝国主義による植民地政策のも

とで苦しんで、最近やっと独立したという歴史を持つ。また、ナミビアやジムバブウェの人々のように、今なお真の独立を求めて戦っている人々もいる。僕らは、彼らの生き様にあこがれ、共感を覚え、何かを感じる。多くのアフリカ人を苦しめる南アのアパルトヘイト体制に憤りを感じるのだ。そして、なぜ、アフリカと日本々なのかというところ、先ず我々は日本人であるからということ、次に日本とアフリカは距離こそ離れてはいるが、多くの面でつながりを持っていくからだ。特に、日本の政府、企業は南ア共和国に進出し、アパルトヘイト体制維持のためにひと役かっている。このような状況の中で、現在我々は、反アパルトヘイトの問題と深く取りこんでいる。世界中の批難をあびている南アの反アパルトヘイト体制。アパルトヘイトの現状、日本の加担の状況など、人向として、日本人として黙って見すごすわけにはいかない状況が存在している。いま、この問題を考えていかなくはならぬと感じる。

駒祭に話をもどすが、三日間を通じて多くの人々が我々の部屋に来てくれた。聴衆の割に部屋が狭すぎたという難点もあったが、逆に大教室でやる講演とはちがって暖みのある雰囲気であった。講演は23日が北沢洋子氏で、日本人としての彼女の体験を通してのアフリカを語ってくれた。25日は、駐日タンザニア大使(代理大使)でタンザニアのアパルトヘイトや新植民地主義への見方、考え方についてであった。24日は、芝生瑞和氏と、京大のG・C・ムアンギ氏によるシンポジウム。テーマの「南ア解放闘争の思想と黒人意義文学」からはかなりそれだが、ナシヨナリズム、アイデンティティなどについての興味深い話がきけた。各日とも、聴衆からの質疑応答も活発であった。

多くの人が、映画をみておどろき、憤りの声を残して帰っていった。日本国内にいと、アパルトヘイトや、それへの日本の加担について知る機会がなく残念であったという声もあった。私としてはアンチアパルトヘイトに世界の世論を集めようとしている国連の運

動が、日本でも根付く可能性があるのではないか、という希望を持つことができた。もっと、多くの人々にこの事実を知ってもらい、考えてもらうことが必要であるだろう。

僕達にとって駒祭参加は活動の第一歩であった。今後は、第三世界やアフリカについての文献の読書会を定期的に行なうことによつて、それぞれの認識を深める作業をしようと思っている。(しなくてはならない)さらに南アからのアフリカ人留学生を日本に呼ぼうという案も出ている。まだまだ何をすることもはつきりきまっていな

いのであるが、参加を希望する人がいたら、いつでも連絡をしてほしい。

GROUP アフリカと日本連絡先
村木 372-0656 または 石村 727-7469

〔78〕

原稿募集

時代錯誤社では、皆さんの原稿を大募集しています。駒場が暮らしていて、ふと感じたり考えたりしたこと、何か頭にきた事等、何でも結構ですから、お送り下さい。

なお今回、特に恒河沙発行一周年でもありますので、恒河沙のバックナンバーを通しての意見や共感、反論、また、駒場祭以来キャンパスを騒がせている、解放派等のセクトをめぐる状況についての意見を、広く募集します。

- ・ 400字誌 原稿用紙の使用希望
- ・ 〆切は1月15日です。
- ・ 宛先 〒176、練馬区練馬4-1-18 小山方 時代錯誤社

駒場祭自主制作映画評

駒場祭における自主映画について

—反省せよ。反省した—

魔界詩人(東大映研)

こう考えても今年の駒場祭は失敗だった。悪天候による模擬店の赤字。三田祭とも客の奪いあい。XX系による占拠事件など、これをとってみてもこれほどホロクソな駒場祭は無かった。

おまけに25日行われた天皇賞は③④⑥という馬鹿げた結果となり、私は非常に気分が悪い3日間を過ごした。(あの場合、スリーマイルアンツはないと思うよ。雨だもん。はずして買っただけ。)その上私はK氏の依頼により、自主映画を3日10本以上観るという破天荒な試みをせねばならず、見事に脳まくえんになっしまった。(有馬記念はサワラシヨウリをはずして買った方がいいと思います。)

と二三の先に駒場祭は失敗であると言いたが、それに拍車をかけたのが自主映画の出来である。まず製作者に言いたい。

映画を作るんだったらもう少し勉強してから作ってほしい。製作意欲に關しては、かなり買える作品もあったが、技術的にみると、合格点のあげられる作品は一本も無かった。最新の自主映画は、技術よりも意欲を、というものが多くこれは大いに遺憾すべき問題である。技術のしっかりしていない映画ほど、観ていこうとつしものはない。実際、いらいらしくくるのである。技術といっても、別に高等テクニックではない。基本的な、ごく基本的な

技術のことなのである。

露光を例にあげてみよう。

如し並々の映画は露光と人物との明暗をはっきりとつかんでいない。彼らの意識の中には露光計の針を平常値にあわせることしか無かったのだらう。しかし、このクラスは、画面が明るい方だからまたよい。逆に画面が暗いために、明るいはずの映画が陰気臭くなってしまう。例もいくつかあった。

他にも例をあげていこう。

◎露光にE.E.を使う。

別に使って悪いというわけじゃない。カメラによ、これはE.E.しか出来ないものもあるのだから。しかし明るさの著しく異なるアングルにパンあるいはティルトをした時に、F値がらつき、画面が明るくなったり暗くなったりするのは、め、ともない。(4.5E.E.は気を付けよう。)

◎ピンボケ

これは問題外。とにかくひどい。可愛想なのであえて団体名はあげないが、あれでよく映画なんと言えるよ。本当に。

アホ?

ピントあわせなんて一番簡単な作業じゃないですか。望遠側にしてピントをあわせるといって基本作業を怠、これとしか思えない。

◎パンの多用

とにかく疲れる。それも速いパンは画面に主張が出なくなるので注意した方がよい。パンのない映画も面白くないが、映画の基本はモニター・ビューであることを忘れずはならない。

◎三脚の使用の下書き。

三脚というものは、画面のブレを防ぐためにある。決してカメラマンが乗るためにあるのではない。小まぎみにふるふる画面は、みっともない。カメラマンは基本姿勢を守りカメラを片手でぶらぶらながら撮影してもらいたい。三脚は万能ではないのだから。二のことは特に外しエエワの諸君に言いたい。

◎ズームの多用

ついでにズームを使ってみたくなるのが、このズーム。必要もないところで被写体が大きくなったり小さくなったりしている映画が多かった。あまり使いたくなくイヤミになる。

◎カットつなぎ

何といっても二匹が一番下手だった。別にフォト・ストーリーではないのだから、同一方向からの変化の無いカットは避けたいものだ。1シークエンスに3つくらいアクシオンつなぎを入れてもおかしくない。それから話者をおぼえて画面に出していいと不安なのかもしれないが、オフのカットをもっと増やした方がよいと思う。

とにかく映画の出来を二番左右するのか、このカットつなぎである。もっと編集をこいねいにや、こもらいたい。もう1つ気がついたことがある。話者が話しおわり、次のカットにいくまでの間があまり空いている箇所が多い。フィルムを切りすぎかなと思ってくらいまで切ったところ初めてテンポのいい画面が出来るのである。あ、まあだあった。無意味なインサート・カットは捨てよう。(54頁エエワの諸君、反省せよ。ナンテチャッテ)

◎録音

映画機のシャーという音が入った録音がほとんどだった。またモコモゴ、こもただけで内容不明の作品もカンバンである。クラフィック・イコライサーを使うとまではいかなくても、もう少し工夫をしもらいたかった。

技術的なことについて、二山まで悪口ばかり書いてきたが、次に内容について述べてみたいと思う。

はじめに述べたように、意欲としては買える作品が多い。内容も苦心のあとが見られ面白。ただ、ストーリーにはかなり長をとり、テーマの打ち出しが感じられなかった作品。テーマを生かす出さうとするあまり、ストーリーが単調になった作品が多かった。しかし、それはそれほど気にしなくてもいい。映画の作り方は、その監督によって様々に違ふものであるからだ。自分の主張をうち出す監督もあれば、マスターハーシヨ二映画を作る監督もある。発展を望む映画もあれば、仲間意識を育めるための映画もある。それはそれなりにどれも素晴らしい。映画としての評価は低くても、出来か悪くても、内容に、製作過程に満足し、何かのメリットがあればある意味で成功といえるのだから。それが、メジャー映画にない自主映画の最大の武器であり、最大のよさなのである。

また彼らの作品には、こちらが無かった。下手は下手なりに、胸をは、こいた。荒々しい画面の中に、映画を作るといふ喜びが感じられた。私のように1年中映画を作っている者がとうに忘れてしまった新鮮な喜びがあった。

彼らは、技術では東大映画にかなう筈はない。大人と小人が勝負しているようなものだ。しかし、映画作りに慣れてしまった我々と年に1度の映画作りに燃焼した彼らと、どちらが映画というものに多頭で手たか。私には恐ろしく結論が出せない。——偽善。

今年の駒場祭における自主映画は、みっともない作品ばかりだった。けれどももそのみっともなさか生き生きしていたようにみえたのは私だけでは無かった筈だ。

彼らの映画を観たあとの不快感は、技術の下書き、内容の幼稚さだけなく、自分達のあまりにもむくなく、こしま、た映画に対する悲しみだったのかも知れない。アホ。そんなわけない。映文研

とはちがうせ。

来年の駒場祭にはも、とまた映画を頼むせ。俺みこえり芸術家
が満足する映画をな。

—— 軟派映画は消えちまえ ——

〔78.5.11〕

駒場祭に見られた学生映画の情況 (1)

宮台真司(東大パロディアスユニティ企画者)

学生が映画を作るといふのは実にしんどい。プロのように明確な
分業など望むべくもないから勢い監督及び極く少数の者たちが、金
銭面、人材面、技術面等々あらゆる分野に渡る様々な制約を踏み超
えようとして、殆んど気遣いじみた労力をふり絞らねばならない。
実際、教晩の徹夜に耐え得る体力のない者は、学生映画に於いては
監督になれない。夜中に静かに原稿用紙に向かったり、白いカンバ
スに向かったりするのは大違いで、非芸術的な雑用や人事に神経
と体力をスリ減らすハメになるのであるから。などとエラそうに書
いたのは自分が学生映画の監督であるからではなくて、そのぐら
いの労力を監督が惜しむようでは、質の高い作品などそもそも作れる
はずがない、と思っただ。だが、「私はこの映画に20万の金をか
け、非常な労力を費して製作しました」などこのたまたま奴の作品に
限って、見れば思わず赤面せずには居られないような愚鈍な画面で
充満していたりするのだから始末が悪い。学生映画の情況とはその
ようなものであって、それを知っているから、ついつい仏ごころが
働いて、「ねえ、僕の映画どうでした？」なんて聞かれたりすると、
「うん、まあねえ、なかなかいい線いってるんじゃないの」と答え
てしまったりするが、言う迄もなく、作品の評価というものは原理
的には作品自体を問題にするか作者の意識を問題にするかしかない

わけ、そうした軸を設定して、あたかも商業映画を裁断するよう
に学生映画を切ってみると、やはり予想通りと言っしかないが90%
以上の作品が論外の外といった感じになってしまい、実に情ない思
いをする事と相成るわけであるが、私の批評の態度表明としては、
そういう思いをする事を覚悟の上で正面から論じる以外に仕方がな
い、ということを書いて置かねばなるまい。

○ 『自殺志願』(53.5.11.8、監督?)

主演の女の子の眼なざしが実にやさしく母性的な感じで、周囲を
温くするみだむように見る者を快く感しさせ、製作者側の意図が知
らぬが全く自殺しそうにも見えぬ、というホメことばを最初に言っ
てしまうと、あとは殆んどホメようがなくなってしまう、といった
感じの、とても自殺を主題にしているとも思えない(プログラムの
口上に「貴殿の人生観、自殺に対する認識を再検討する絶好のチャ
ンスです」などと書いてある)の、心気ながき映画。あたかも中学生
向け少女漫画のように、こども自殺にロマンチック粉飾をこらされ
春の野辺の如く香ぐわしきイメージを彩られると、まじめに見るの
も馬鹿／＼しくなってくるが、上映会場で、上映後、観客の一人と
製作者らしい連中が自殺について何やらマジメに議論したりするの
を聞いていて、どうもこの連中が本気で自分の愚鈍さを映像化して
しまったようであることがわかり、ひどく驚いた次第だ。要するに
勉強が足りないのだ、彼らには。「僕らには生きて行くべき積極的
理由もないが、かと言って自殺する程の理由もない。そういう情性
しか残されていないのが僕たちの現状なんだ」なんていう呟きが製作
者の間で交わされていそうだが、こういうのん気な連中の言うこと
など聞いてる暇は、誰にだってないハズである。いわゆる見るだけ
時間のムダ映画である。

○ 『CRIME CITY』 (東大映文研・立川夏夫監督)

学生映画の一方の極を代表するアクション映画である。アクション映画は既にかなり明確な規範の体系がつくられていた事もあって製作がある程度たやすく、そこに作者側の主體的な問題意識がかけられる事がなくとも、また美学的な追求がなくとも、何とか見られる映画が出来上がったという事があって、例えば「びん」のオフシアターの一般公募作品のうちかなりの部分をアクション作品が占めているような状況もそのような理由があったことなのだ、ということも頭にに入れておいて欲しいが、商業映画へのラブレターといった私的側面をとりあえず排除して考えてみると、学生が思い入れたっぷりに苦勞して撮り上げたショットでさえも、プロが日常何の熱意も感懐もなく事務的に撮ったショットを凌駕するのはそれこそ並たいていのことではなく、例えばこの映画の中の280と290とスプリンターの追跡劇にしても、学生映画であればどんなダンスも愛嬌として許せてしまう、といった視線にとっては、かなり肥大した形で評価されようが、実はプロがこんなカーアクションを撮りつけないことは明々白々なのであり、同じことは、随所に見られる間合いの少しずづズした乱闘シーンに關しても言えるのである。でも「ラブレター」として見てあげれば、あらゆるチャキさが取りも直さず愛の告白に変容してしまうわけで、けっこう楽しくもあることも否定はできず、そこを捕えて、まあ学生映画にのみ特徴化された表現としてうけ入れるのもよからう。

学生映画を見るひとつの楽しみは、意図せぬ撮影ミスが、思わぬ豊かな色どりを映像に与えているのをめざとく見出すことなのであるが、この映画でも、足を撃たれてびびるをひきひき追っ手から逃れようとする男が、地下道の階段を昇るときに、何故かスタコラサッサとまるで健脚者の如く駆け昇ってしまう所があって、爆笑がおこったりしていた。この映画、監督の意志とは無関係に(監督の意図は直接聞いて知っている)実によく笑わせる。映像とはそういう

もので、監督が「黙れ!!」と言っているときに、ひとりでに語り出さんとする特性を持っているのだ。

一つだけに絞って重要な欠点を指摘すると、この映画はキャラクターに人をひきつける力がない。こいつだけは死んで欲しくない、といった奴がいないので、格闘シーン等に於てもまるでサスペンスを感じず、だんだんとシラケてくるのである。実は規範的アクション映画に於て作者が主體的なこだわりを表出し得るのは、殆んどキヤラクターを通してのみと言つてよく、この点を避けるというのは、やはり安直な姿勢である、といいたい。研究し給え。

○ 『VELEVETT OVERGROUND』

(東大映文研・石川達哉監督)

継時的な説話展開を捨て去り、必然性をキカットつなぎと、正にこりあえず、といった感じの、映像と希薄にしか結合しない会話断片との集積が、トータルな形で作者個人の感受性と思考を表現するといった方法に拠っている。と言えばお判りのようにこれは無論、ゴダールの切り開いてきた方法の模倣ほうであつて、この映画も気付かれる事を意識的にねらいつつゴダールの「東風」や「中国文」を盗んでいるのであるが、「ゴダールのリメイク」といえば、既に立教パロディ・アスニティの万田邦敏らの先駆者がいるわけで、石川(彼は私の友人である)がゴダールをリメイクするのであれば、当然それを乗り越える事が望まれるわけだが、実際のところ、私にとつてはやや不満足な仕上がりとなつてしまつてゐる。映像に絶えず文化的な分節化をほどこし、意味をぬりたくらないうちは価値を認識し得ぬ、といった手合の「愚鈍な感性」「高慢な知性」を粉砕する。この主題は、既に一般になじみ易いものとなつてきていると考へるが石川程度の表現では、知を呪詛するそぶり自体が、他の知をわらうことを特権化された、己れ自身の知的態度の巧妙な擁護、という、石川自身意図しなかつた反動的身ぶりにさま変わりしてしまう可能

性がある。この変貌をささえるのが、映画の中に見られる一枚腰の主題の押し出しである。石川よ、君は「お前ら観客はしようのない愚鈍なお人好しだ。のん気にそんなとこに座って俺の映像が理解できるとも思ってるのが、バカモノめ！」ぐらいに露骨に観客を挑発してみるべきであった。事態はちがったものになったはずである。君は余りにおたやかにすぎたのだ。とは言うものの、この批判は高いレベルで行われている。この映画は平均的な水準をとくに凌駕しきっていることはいうまでもない。

紙数も尽きてきたので、あと4、5本の評価は次号に載せることにする。

私の脚本、監督した、70分の大作「ミクロコスモス」(未完成版)を見た方は、早速に批評していただきたい。内容紹介は、東大新聞駒場寮特筆号の第一面に載っている。自身の作品についても次号で語りたい。

映文研の和住洋一郎(一年生)が作った40分のホモ映画——まず、ここ10年間、東大で製作された映画のうちで最大傑作であろう——についても語ろうと思っている。題名を「ジャム」(というが、センチメンショナルな側面を差、引いても、最大傑作であることに変わりはない。では、次号を御期待下さい。

(文造3A)

アピール

物理倉庫つぶし反対!!!

新学館には現学館なみの自主管

理権を!!!

時代錯誤社編集部

集 募 員 部 集 編

みなさんお元気ですか？

我が社はいよいよ創立一周年を迎えまして、「恒河沙」の名も定着し、社員の間にも一層強まっています。残念なことに来春には社員の半数が本郷へ去つてまいります。そこで、どうしても新入社員を求めたいのです。

編集の仕事はなかなか大変ですが、印刷された恒河沙を初めて手にする時や、読者の人から「ピシ」と反応が感じられる時は、なんとも嬉しいものです。社内の奮闘気は、わきあいあい、なおかつひつちやかめつちやか、そのものです。理系の人が少ないので、ぜひ理系の人にも恒河沙づくりに参加していただきたいと思ひます。

恒河沙を讀んで、面白いな、自分もつくつてみたいなと思つたあなた、ヒマをもてあまし、自分のエネルギーを何にぶつけていいのかわからず困っている君、仲間といっしょに、駒場の文化の創造をめざす、時代錯誤社に入ってみませんか。

昼休み生協前の街頭販売をやっている社員に、気軽に声をかけて下さい。(但、賃金はしません。)

駒場に來たら必ず誰でも通らねばならない所といったら、門と守衛所だろう。駒場の学生を長い目で見守り続けてきた人といえは筆頭に挙げられる守衛さんを、恒河沙綿集部ではクローズアップ第三弾として取材してみた。取材をOKしてもらうまでがひと苦労だった。勤務の性質上、内部事情に詳しい守衛さんから、公にしてはならないことまで聞き出し、それが記事になって、当局から注意を受けたことが以前あったそうだ。良心的なコミュニティマガジンであることを必死に強調し、取材を許可してもらった。(だから今回は、写真は勘弁してください。)でも、その後、いれてもらった紅茶には感激してしました。

「守衛から見た現代学生気質みたいなものを話せばいいのかな」と言いながら、話は自然とセクト云々の方へ向いていった。職業柄やはり一番気に懸けてきたことなのだろう。「江田五月委員長の前からかなあ。アジ演説が始まったのは、話あまりうまくなかったけど、人を魅きつけるものがあったね。果大闘争後激しくなって、医学部にあった本拠も今では駒場に移ってしまったからね。」

守衛さんは、八年ほど本郷にいたことがあろうだ。「当時の学生は親切でおとなしかったです

人物

クローズアップ 宗像さん

駒場の守衛

ね。今みたいな苛立ちはなかったですよ。闘争以後は殺伐としてしまつて。闘争でこうも人間が変わるものか、って思いましたよ。セクトの人たちは石や竹槍を持つし、旗なんてもとはたきあうためのものだった。今は下火になつたけれど逆に恐れね。殺人的行為がうまれてきたから。もとはセクトのリーダーになりたくて争つていたんですよ。もとを辿れば理論は一つなのに、新派が生まれ過激になつて……過激派に殴られたこともあつたという守衛さんは、心算からセクトの争いはやめて欲しいと願つているようだった。優しい物腰で、一言一言かみしめるようにして話される言葉に対し、聞きもらしては申し訳ないような気がした。65才で駒場勤続19年という年輪のようなものを感じた。

今の学生に対して何かご注文は？
「学校生活の中の秩序を考えてもらいたいですね。後始末一つとっても不十分だし。特に困るのは木に画鋏で紙を張ることです。やめて欲しいですね。」

「それと駐車場の問題についてルールを知らない。時間を守れないという残念さ。」

駒場祭について感じることを……

「昔は文化的学術的だったけど現在は各サークルの資金稼ぎになつてしまつて。露店の多さは驚くばかりですね。今年は特にひどい。」

電車の中で聞くけど、一般の人ほとても食べる気にならないと話してますよ。」

「演劇団の勤興も驚くばかりです。」

「昔は自分たちの勉強の裏付けとしてやりました。祭だから結構だと思つけど評判はあまりにも悪いですね。」

駒場自体の変化で特に着しいのは？

「食堂の衰退と生協の発展かな。一番発展したのは生協だね。学内の一等地だもの。それに現在はノンセクトが多いこと。昔は自治会もつと大きな力をもつて学生をひきつけていたよ。」

一番嬉しいことは？

「感謝の気持ちを表わされた時です。先日も脱きゅうした学生がでて、救急車を呼んだのだけれど、その後でお礼を言われてね。学校の拠り所として守衛を頼りにして相談に來てくれます。やはりうれしいですね。セクトについてはおもしろくない面があるかもしれないが、管轄外のことまで相談されることもあつて、わりとたいへんだけれど、悪い気はしないね。」

「それから、新入生の教室の案内がまた一苦労だね。昔は親なんかついてきていたなかったよ。今の学生はいつまでも子供だね。」

最後にお名前をお聞きしてもいいですか？

「あまりは、きりさせないでもいいけれど宗像です。」終始、心の暖かさを感ぜさせる人だった。

【佳】

時代錯誤社駒場祭企画

「に異議なし？」

— 廣松 渉氏を迎えて —

小状況を抜け出し得ない我ら

時代錯誤社では、第30回駒場祭の最終日、11月25日午後0時より御番教室において、「『可若者論』に意義なし？」と題し、われわれ自身の問題として何らかの方向性を得ること求めて自由な討論の場を設けた。以下はその記録である。御一読いただき率直な感想なり意見なりを寄せていただけたらと思う。会は基調発言の後、参加者も含めた討論に入っていた。

■基調発言■

小山 敦史

我々の世代は「シラケ」「やさしさ」などと言われる。こういう言い方に反発を感じる一方で、たしかにぬるま湯にひたつてイージーにやっている所はしっかりあるようだ。外への方向性がなく内にとじこもつてうじうじしているという面は否定できない。社会に対する目、人間関係などを考えてみると、それはかなり言えることなのではあるまいか。だがこれではどうしようもない。第一に、それでは自分という存在があまりにうすっぺらい。価値観などというものは他の価値観や外の世界とぶつかりあう中ではじめてまともなものになる。内にとじこもつて、「大事」にあたためているだけではこれだというような確たるものは得られない。

第二に、今の自分が楽しく平和で、まわりにも何も問題はないと思ひこんでいようと問題がないわけではない。自分が「平和」な一方で、ちっとも平和じゃない人もいるだろう。また例之は大気汚染のように、実感として感じられなくとも自分が問題と無関係とはいききれない。

次に、なぜどうしようもないような状態なのか。いろいろ原因はあるだろうが、例之はマスコミ。マスコミは大量の情報を我々に与えてくれる。だがそれは、結局単に情報にすぎず、自分の存

録再上誌論討

論者若

ルネ (順不同敬称略)

廣松 涉 (東大教養学部助教授・哲学)

高橋 宏樹 (慈恵医大1年)

本田 真 (日大経済学部3年)

浜田 正 (東洋大文学部哲学科2年)

片桐 弘子 (東大教養学部2年・本誌)

小山 敦史 (東大教養学部2年・本誌)

(司会) 合原 亮一 (東大教養学部2年・本誌)

司会 これでは基調が終わったわけですが、これから、まず我々が現在おかれている状態、これは人によって認識が違ふと思えますが、まずこれを考え、次にどういう所が問題なのか、もし我々が何らかの行動をとれるとしたら、どういう形でやっていけるか、やっていくべきか。そういう順で話していきたいと思

この駒場寮にも、解放派が来て問題になっていますが、我々が彼らに対して感じるのは、ただ感情的に恐いだとか、いやだなとか、感情的なとらえ方をするわけですが、一昔前までは、いわゆるセクトというものが一定支持されていたわけで、我々はこういう変化をどのように考へたらいいのか。そこから入って

いきたいと思えます。
今僕達は何となく学校に来て、勉強してと

存を問われるような衝撃を与えることはできない。「問題」となつてもよい情報も「問題」にはならず、単なる情報にとどまる。我々は世の中をわかつたつもりでいても、それは本當にわかつて

いるわけではない。
さらに、教育・いわゆる競争原理が基本的に貫徹している中で

は、技術としての「お勉強」以外に切り捨てられてしまう。そこ

では、人間や社会を見る目も、創造性もあつたものではない。

あるいは、夢がないということ。要するに社会が進んでいく方向性・展望みたいなものがない。みんなにある程度共通する理想像がないとでもいえるようか。行動のエネルギーの究極的なところは理屈ではないので、こういう夢がないというのは、かなり影響が大きい。

二つの中で、我々はさしてコントロールされているという意識もなしに、ふやけていく。

最後に、ではどうすればいいか、という点だが、二つのところはよくわからない。ただ、いろいろ行動していく中から何かかめめるのではないかという気はする。
(要旨)

「詳しくは、恒河沙号「ドツボ」に詳しいはるか」参照」

というのが中心で、サークル活動とかがそれほどさかんだとは僕には思えないわけですが、でも一時代前まではかなり多くの人が違つていろいろな問題に興味を持っていろいろなることをやっていたと思うわけです。その違いははっきり表われているのかセクトに対する見方で、昔はいろいろあつて、人がたくさんいてという状態だったのか、今はコワイとか、よくないものと考へられているわけです。その点で

うですか。

高橋 僕の大学はセクトなどはかけ離れている平和な大学なんだけど、なんであいつらに嫌悪感を感じるかというところ、抽象的だけど、人間性とか、理論の最も下の部分にある感情といったものが感じられない、逆に言えば最もヒステリックで感情的な感じだから。

本田 僕なんかいろいろな集会に頻出してると、真近に見て感じたのは、内ゲバがかたなり影を落としている。セクトで動いている諸君は、少しでも方針なり何なりが違くと相手を何々主義という形できっぱり切つて切り落してしまつて、お互いの話す余地を保持しようとしなない。最近顕著なそういう人間とのこのあり方、物の考え方に疑問を持たざるを得ないという感じがするんですがどうでしょうか。

小山 うまく言えないんですが、率直な感じとして、今高橋君や本田君が言ったようなことは奥感としてあります。一つつけ加えれば、みんな最終的にめざす所はそんな違わないのに非常にショートレンチになった時には平気で人を殺すという、憎悪みたいなものになつてしまふということはわからないです。

浜田 僕は東洋大のものなんで、今表の方で解放派の人がさわいでるようですが、東大の状況についてはよくわからないのでさけないと思います。東洋大については、新左翼系

の内ゲバつてのはよくあることではなくて、昔は左翼が多くいまして、その人達が東大みたいに激しい形じゃないけど、一年に二、三回よくやってたことです。その事について僕は、別に驚いたり、嫌悪感を感じたりはしないわけですよ。自治会をやつていて、彼らと話すことがよくあるんですけれど、大衆運動が組めない今日、だからこそ内ゲバみたいなことをやつて一つの緊張感みたいなものを保つてるといふことは充分あるんじゃないかと思つてます。内ゲバつて現象は僕自身恐いんですけれど、自分で何らかのことをやらなくてはいけないときに彼らと対立してしまふときは、暴力沙汰とまではいかにしても、ふんばつてやつてかなくちゃいけないと思つてます。内ゲバに嫌悪感を感じている人達は、一般学生という名でくくられてると思つてんですけど、大学の中で何にもやらないのに、ちょっとした暴力事件が起つたりすると、大学当局の人達にカシにされて、一般学生が迷惑してるって形で終わらせられようとしてるわけなんですけど、そこにも何か大きな疑問を感じざるを得ないのが僕の考えです。

A 東京女子大短大一年の石川です。今日は憧れの廣松先生がいらっしゃるといふので（拍手）胸をときめかせて来たんですけど、何を喋ろうかあんまり考えてなくて、今日のタイトルは「『若者論』に異議なし?」ってことなんですけど、一番初めの方の言うことを

聞いてると、マスコミとかの今の若者論をみんな認めた上で、それでは私達は何をやっていくかって感じで提起してらるみたいなんですけど、まず、本当にシラケだけなのかってことも問題だと思つてます。私達が70年代後半の状況を考えていくのに、さっきも出たんですが、60年代後半から70年代初めの、いわゆる政治の季節の若者達との連続性っていったものもあると思つてます。

今、セクトの問題が出たんですけど、60年代には全共闘つてのがあつて、全共闘とセクトつてのは絶対に一緒に出来なかつて思つてます。全共闘の提起した問題つてのはすごく大切だと思つてます。マスコミは、一般学生と暴力学生つて図式をあてはめようとしたんですけれど、全共闘つてのは「一般暴力学生」つて感じで、今の私達の状態を語ろうとする時は60年代後半から始めなくてはならないんじゃないでしょうか。

B 僕なんかセクトの人とよく接触するんですけど、何が問題かって個人的に考へると、恐がつてるって以前に、マスコミから入ってくる情報つてもんはあくまで入ってくるものであつて、自分が求めた知識ではない。求めてその中に探すのは違つかもしれないけど、それ以外はただ入つてくるもの。それと同じように解放派とか革マルとかがマスコミによつてどんどん入ってくる。実際自分で考へようとしなないですよ、その中で、革マルっ

て何だ、解放派って何だ、考えてない。考えてなくせに頭の中に入ってくるから、あれは恐いんだと思ってるんじゃないかと思う。確かにね、実際立ち止まって考えてみると恐いことは無い、そこが一致してるだけに全然ズレはないわけよ。そこらへんで大分僕なんかが見ている恐さと、本当はこういう言い方はよくないけど、よくいわれる一般学生の見ている恐さは全然違うんじゃないか。

司会 どなたかいらっしやいませんか。

C セクトの話が出ていますが、中核とか革マルとかああいうのは関心を持つのもアホらしい。セクトとか共産党とか原理解とかもピシッとまとまって、見ると面白いけど、共同幻想によって、ピシッとまとまってる。

廣松さんに敬意を表してというか、かなり曲解してるかもしれないですが、物象化的錯視というところがあるに違いない。共産党なんかよくわかるし、ここにみるみんなにもあると思うんだけど、あんまりものを見たりしない。朝日新聞の投書なんかで、私はものを考えてるんですけど、いい加減な人の言ったマヌコミ情報の中で、物を言わされてる。言語表現は規制されてるわけで、みんな大衆とはどういうものであるかとええようにするわけだけど、絶対ねじくれた形でしか出てこない。セクトってのは、一般の日本人がどういふふうに住して、どういふふうで考えてるのかを全然考えてなくて、みんなすこ

い一面的な見方をしてて、みんな苦しい生活をしているから立ち上がろうというイメージがあつて、ナンセンスな所がある。みんなの状況を変えなくてはならないといういらだちみたいなものはある。しかし何かをする為には現実を錯視しないと出来ない所がある。何か疑問を感じてパツとやっつけてしまつて、やっけるうちにモラトリアム期間が終つて、社会に組み込まれ、どこかに就職しなきゃならない。だから行動する前に孤立して、じつくり考えてみなくちゃならない。今の思想はずごくいいところまでできてると思うんですけど、状況に対していらだつといつても、はじめにあつたけど、状況を変えなくてもけつこうみんな乗しくやってるわけですよ。社会の体制が変わらなくても乗しく生きることにはできるわけで、否定的にはなく、それなら乗しく生きなきゃならないんじゃないか。

□ 10年前に立ち返って

D セフトは理論的じゃないんじゃないか。旧左翼みたいなのは理論的じゃないのはもちろんかもしれないけど、それにアンチ・テーゼみたいな出てきた新左翼にしても、解放派なんか見てもどなるだけで、議論ができないうみだいでやりきれない感じがするんですけど、それはともかく、それに対して、みんなさん異和感を感じらるって言うてらっしゃるんですよ。戦後のとらえ方に関して、この間朝

日新聞に山下重さんが書いてらっしゃったんですけど、戦後新制大学ができて、最初の10年位は、旧制高校的な、エリート主義的な色彩があつたといふんですよ。それ以後の10年が高度経済成長の時代で、大衆化が進んできた時代。その10年の最後の結末点が45年のいわゆる全共闘運動のはじまりですね。それ以後の10年ってのは、大衆化状況みだいなのが、どんどん進行する時代だったんじゃないかって気がするんですよ。議論のワク組みを変えちゃうようじゃ悪いですけど、そういう認識に立って、今までのような主観的セクト恐いとかいう感想の表白じゃ議論にならないで、もうちょっと客観的に大衆化状況という位置付けにたつて、そこで全共闘運動21といふものが、問題になると思うんですけど、さっきの方がいつていたように、一般学生が同時に暴力学生でもあるという、インテリが同時に大衆でもあるという、非常にユニークな運動だったと思ふんです。で、その全共闘運動の中で、どういふ問題が提起されてきたかといへば、僕の思うに3つぐらい提起してらるんじゃないかと思ふんです。

1つには、折原さんなんかもおっしゃってるんですが、知と生の乖離という事ですが、思想と生き方というのが全然離れていくことじゃないか。つまりマルクスなんかがフォイエールパツハに關するテーゼの中で言ってるんですけど、これまでの拍子者ってのは、世界を

解釈したに過ぎない、問題なのはそれを変更することだ、といういい方があるんですね。で、大学教授のマルクスに関する論文なんか読んでると、自分にとっての目標はマルクスの思想を主体的にとらえかえず事なんだなどと書いていらっしゃる。けどマルクスの思想を本当に主体的に捉え返したら、大学の教授なんかや、てられないような問題提起だったと思うんですよ。端的にいって非常にきつい言い方をしちゃ、うと。第二には共同体的な視点、言うが、精神労働と肉体労働の分離の廃止というが、マルクス主義的じゃなくてむしろ実存主義的というが、アナーキズムみたいなアマルガムという感じで、一気に共同体的な、理想的な社会を実現しようじゃないか、解放区という形であっても実現しようじゃないか、そういうった、ある意味でマルクス主義からはずれた様な、一気に理想を実現するよ、うな指向があったように思うんですよ。第三点としては、一般暴方学生という形での、いわゆる旧左翼を乗り越えていく運動形態での新しさ。これは廣松先生なんかも評価していらっしやるんですけど、これがあつたと思つて、この三点があつて、それが鎮圧されちゃってどんどん大衆化するような状況で、今の我々のやりきれなさ、疎外感みたいなものがあるような気がするんです。だから10年位たち戻って全共闘運動の提起した、知と生の乖離とか、理想社会の実現とか、運

動形態の新しさとかの、その三点のうち廣松先生を挑発するような意味で、知と生の乖離というあたりご意見を聞きたいんです。先生も全共闘運動の問題提起を取り上げられて、大学をおやめになるという経緯がありますね。非難してるわけじゃないんですけれど、先生なんかそのあたりをどういう風に考えてそのようになされたのか。僕なりにまとめた全共闘運動をどのように定義なさっているのか。その定義に対して我々は全共闘運動をどう受けとめたのか。そういうた事を考えた上で、それ以後の社会構造の変化、意識の変化という流れの中で、今我々のセクトに関する気持ちとか、やりきれなさとか、10年前に立ち返ってそこを論じてから、客観的に我々をもう一度位置づけ直すという形で議論を進めていったらいいんじゃないかと思う。議論を作っていく様で僭越ですけど。

□ 身近で切実な問題を

I 非常に高尚な意見を聞かせていただいたてあれなんですけど。いつも若者論を始めるのと10年前に話に戻ってね。真向から対立する様ですが、小山君が問題提起した後で僕が聞きたかったのは、今の自分の状況に対してもいいし、自分が本当にどう思っているかというところが大事だと思ふ。セクトって事に話が移っちゃったから話が本筋からずれていったような気がする。もっとローカルな事でも

いいし、自分が今や、てる事でも勉強してる事でも、授業をうけてると先生に対して反感を感じる何か何でもいいですけど、若者論を考える上で対象するのは自分達なわけで、自分達ってものをマナイタの上に乗せないと話ができないから、そういう形で議論を進めた方がいいのではないかと思うんですけど。

E 現在の情勢ってこと考えてみますと、もうむちゃくちゃなとこまで来たなって感じがするんです。それはどういう意味か、というのと、もう全部ぶっこわれてしまった。さっきの方が、思想的にはよくなってるんですけど、しゃやいましたけど、思想的にもスタスタになつてると思います。っていうのは、例えば世界情勢を見ても、東西対立は全部ぶっこわれてしまいました。日本帝国主義、てのもさうです。たとえば10年前はやはり東か西か、てこと、或いは社会主義か資本主義かみたいな対立の図式、てのがまだ残つてたと思いません。でももう全部ぶっこわれてしまいました。今あるのは国民国家だと思えます。国民国家に共通するのは？ 互いに自分の利益が対立しているだけだと思えます。パワー・ポリテイクス、まさに今はやその通りです。そういう中で我々は今、どうして政治政治と言うのでしょうか。確かに政治、てのは大事な事です。どう大事か、て言う、僕らが生きてるって事は政治に関係ないことじゃないからです。僕たちのする食事が経済問題でおいしく

なつてきたら食えなくなりませう。そういう事では政治が問題になってきます。それはあるんでせうけどそうじゃなくて、世界情勢がどうの日本革命がどうのっていった形での政治、これは、もう全部ぶつとんでしまつたんじゃないか、って気がするんです。それで僕はむしろ言いたいんです。政治的関心を持つことがいいことだとか、それでもセクトは恐いんだとか言う前に、あなた達にとって何が切実なんでしょうか。例えば身の回りの生活、となりの女の子、音楽が切実だつてのはあります。その中から又政治の問題が少しづつ見えてくるかも知れない。それならばいい。しかし、大上段に振りかぶるのは。例えば理想社会の実現とか、もちろん昔はありました。その可能性があつたからです。でも今は全部吹っこんでしまつた気がする。セクトの問題もさうです。もうここまで来て、東も西も社会主義も資本主義も対立の図式が意味なくなつた今、あれもただ単なる力を持ったひとつの組織にすぎません。それとそれの対立に、何がいい何が悪いとかそんな事は全部意味がない。あいつた形で組織化してやつたって、何にもならないんです。ただ、その中で具体的に党派の活動をしてる一人一人の人間はまた、その人の生活を持ってゐるんです。例えば青解にしてもさうです。学生の部分は僕は余り好きではありませんが、青解には労働者の隊列があります。あの人は例えば水道局に勤め

たりしながら自分の生活を持っています。その生活の中から労働運動が立ち上つてきます。それは評価できないはずはありません。(ももちろん間違ひもありますよ) そういう風に考えた時、今それほど切実になりようもない政治の問題、このを何故大きく語るんでしようか。それも現実から極めて乖離したところぞ。10年前が何ですか。それは10年前はああでしたよ。ああならざるをえなかつたし、又、ああなることが良かったかもしれない。でも今こうなつてきた現在、今、我々に切実なる問題には、何の問題も出てこないでしょう。あ、最後に一つの暴力の問題について、さっき暴力学生がどうのこうの、て言つていたけれど人向つてのは何かをする時には観念的な力と物理的な力のどちらかを使うしかありません。組織もさうです。で、よく民青の諸君なんか言われる暴力はいけない、てのは、物理的な力がいけない、という意味なのかなと思ひます。でも例えば暴力学生は処分しない、と学生証をとりあげるのとは多分物理的な力だと思ひます。そういう風に考えた時、いわゆる暴力がいいの悪いの、ていうのは全く下らない、ていうか、非常に微妙な問題だ、てことがわかります。例えばここに僕の友達をポカッて殴つたとします。彼は何で殴つたのかと思つて、またつかみかかつてくるかもしれない。それはそれだけの事です。君、暴

力はいかんよなんてことは言わないでさね。でも民青の諸君にひつかかると暴力はイカンとか言つて何かおかしいわけですよ。その辺の問題、これは、もうちよつと細かく考えこみると、すつきり答えが出るような気がします。それでもう一辺皆さんに問題提起したいと思ひます。あなた達にとって切実な問題、て何ですか。そして、政治、これはどういった位相で、どの水準で切実なんでしょうか。

□ 楽しければいい？

司会 どうも。いろいろ意見が出たんですが、できるだけ自分自身にひきつけて具体的になすべしで議論を進めていきたいと思ひますので、現実にはひきつけて自分自身がこう思う、という所を言つていただければありがたいと思ひます。もちろん理論的な面は、現実を裏付けるワケ組みとなるもの、て、それも御自由に言つていただきたいと思います。

F 簡単に言つちゃうけど、何か今の自分はやもやというイメージなんです。去年、友達なんかと読書会やつて、いろいろな社会の問題とか労働者のルポルタージュなんか、すごい悲惨なんです。そういうの読むと涙みんか出てくるんです。何砂の器、て見た人多いだらうけど、ああいうのを見ると涙が出てくるんだけど、涙が出てき

もそれだけで終わっちゃうんですよ。さっき小山君が言っていましたけど、マスコミは一つの情報でしかないっていうかな、自分の核となるような情報じゃなくて、そういうモヤモヤの情報と持ってる時は涙ぐらい出てくるんです。僕はそれを条件反射というか意味のない涙、全然日常の行動の中に出てこない涙だと思っんです。何ていうかな、自分のことしか考えられないっていうか、他の問題っていうのがすごく遠くになっちゃうっていうか。問題がいっぱい見えるんですがその見えるのは頭の中でわかるだけで、例えば基調発言にもありましたが、ベトナムの人が死に、難民になっている。で、かわいそうだなって思うけどそれで終わっちゃう。自分の感受性がマヒしかけるっていうか、感受性で外部の問題をどんどんとらえていく力がないと、もう理論やってもダメなんじゃないかというか。感じられないという所は自分にとって一番大切な問題だと今思ってるんですけど。

小山 ちよっと聞きたいことがあります。

C君が「楽しくやればいい」と言いましたが、それを肯定的に見る意味までは僕も賛成なんです。ただどこで、今F君が言った様なシそれだけでいいのかわ、のが全然無いか、このがひとつ聞きたいんです。それからもう一つE君が言ったことですが、自分にとって切実な問題が何かという向いを発するということ、基本的な向いは僕は正しいと思います。だけ

いそこではその向いを発し続けるという姿勢を失わないから意味があるんで、だからいけば僕が最初に言ったように、マスコミからどんどん情報を与えられていって今は平和だボワーン、という風になっちゃったらぬ、何も切実にならないんです、自分のいわば鈍化した感性のレベルでは。だからその所で見てこう見てこうとしかかったらどうしようもないんじゃないのかって、そういう風には考えませんか。

C 楽しみだけだと思いかってことですけど例えばね、セクトの皆さん或いは、ここで議論をなさっている皆さんは、どうして政治のことなんか考えるのか、行動しようとするのかという、やっぱり僕はそれが楽しいからだと思っんです。原研研の皆さんが頑張ってるのもね。結局人間の動機は何かというと、哲学の場合でも、世界の全体像を、自分の疑問をみつけてそれを何とかしようっていうんじゃないんです。自分をとり囲んでいるもの全を、どういう構造によってものを食べた、寝たり、人につきあったりしているの、このものをつきとめてみたいんですよ。そうすると世界とピツタリ生きていけるんじゃないかという気がするんです。言っちゃいけないのは、人間と他の人と日常生活の次元で絶対自分の言いたい事は、つきり相手に伝わる、とがなくて、つまりコミュニケーションであるとともに、どうしようもない亀裂を感じず

せるもの、であるという。例えば動物なんかは言語とか意識とかなくて、人間みたいに主体的に働きかける自然を確保したり、他の動物を、蚊を殺すみたいに殺すなんてことはできない。それを人はかわいそうだと思うがもしれないけど、実は完璧なコミュニケーションを保って宇宙と一体して生きてるんじゃないかっていう風に思っんですよ。だから、人間はそういう動物から切り離されてる。要するに人間ってのはサルが未熟な状態で生まれきたものなんですよ、それで宇宙・自然との合一感を失ってしまっている存在なわけ。岸田秀さんの言葉でいうと自衛的ナルシズムの回帰、っていうか、そういう非常にエロチックなものであって、僕はそれで楽しいわ、はいいいんじゃないかと思っんです。

小山 楽しいって言葉の意味を、僕はわりと卑小に解釈してて、すみません。

□ 「かわいそう」でいいの

E さっきのこと、F君が言った、例えば労働者の生活を見ると涙が出るということですが、もうそういう発想もダメなんじゃないか、もうそういう発想もダメなんじゃないか、よく考えて御覧なさい。僕がものすごく悲惨な労働者だったとします。食うや食わすの生活で、お金が無くて、ヨタヨタしてるとします。でも、そういう生活の中でも結構面白いことあるわけですよ。カアチヤンきれい

だとか他よりは米がうまいだとか色んなこと
があると思うんです。それなりに楽しみがあ
ってでもまあ金が無いのはやだからそのうち
にもうけたいなと思ってる。そう人達がいる
とします。例えばそこに僕達っていうかあな
たみたいなのがいて、遠くから見とかわいそ
うだと思つて涙を流してる。するとどうい
う人達から見るとアホらしくなるんじゃない
でしょうか。それは極論ですよ、ですが、経
済の問題は具体的に収入の違いとか階層とか
解決していかなきゃならない問題ですがしか
し思想的には、問題を立てなくてはならない
のではないかと、義務感におびえながら立
てていくのとはもうダメだと思つて。極
論ですよ、例えば身障者の問題があります。
身障者は差別されてる。あれはいけない。で
も、差別はいけないという声が多いですがそ
う言う人が、あの人達かわいそうだからって
言い方をします。これも変ですよ。その人達
は普通に生まれ生きて普通の生活だと思つて
同んなじ人間だと思つて食っちゃ寝くして
TVでもみたりしてるわけですよ。そういう
人達に対して、同じ人間がかわいそうだな
んて言われるとゾッとするんじゃないでしょ
うか。でも、つきあってしまった身体障害者が
いたとします。そういう人がどうしようもな
く物理的に困窮して、例えば人から白い目
で見られたりしてかわいそうだ、って時にな
つたら、その人といっしょに、その人との人間

係りたいな所から自分の問題として身障者の
問題が切実になることはあります。でも漠然
とした身障者問題ってのは、あの人達かわい
そうだから、という形で切実にはなりようが
ないんです。このことは少し攻撃的ですがも
っと挑発してみたいのと言つてみました。そ
れから君が言った、楽しければいいって
いう形ももうこれは原則的にダメなんです。ダ
メってことはどういうことかといえ、いろ
んな思想がありますね、その人達は自分の信
念に従つてや、てるから楽しくてまあんな
ものだ、と思つてのはダメなんです。やっぱ
あなたにとつて原理研の思想ってのは、ダメな
思想なんです。あなたとつてある思想、この
がダメだったらさうとしか言ひようがないん
ですよ。楽しければいいって形、つばねて
もいい所もあります。でも思想の問題、この
はつばねようが無いと思ひます。例えばこ
こで皆さんニコヤカに笑つてらっしゃいま
す、人々々の思想があると思つてます。だ
たら、どつかが差別する地点があるかもしれ
ません。それを探しましょうよ。そこから何
か豊かなものが出てくるかもしれない。
F 涙を流す、という発想からは行動は出
てこない、これは僕が言つたんです。自分
の事しか見えないことに問題があるんじゃない
かって。

浜田 せっとな、差別の問題あるいは労働
者の問題について話が進んでるんで、僕も今

狭山の問題にちよつとかかわつてるんで、そ
のことについてとつても興味もあるし、皆さ
んに、少し話をさせてもらいたいと思ひます。
確かに、今E君の言つたように、身体障害者
に対してかわいそうだと思つてるのは誰し
も持つてると思つし、余り金のもらえない労
働者、山谷だとか釜ヶ崎の労働者に対しても
かわいそうだ、大変だ、って気持はみんな持
てると思つてますよ。ただそれだけ、運
動できないし、確かにE君が言われたように
そんな気持ちを持つてるのは、相手にとつて
非常に迷惑だと思つてますよ。しかしなが
ら僕らが教育の中で受けて来たひとつのヒ
ーリーニズムみたいなもので、それをかわい
うだと思つてしまふのは当然じゃないかと思
うし、もし運動が始まる時それを捨象してし
まうん、あれば、運動すらも始まらないんじ
やないかって思つてます。それは端緒にす
ぎなくて、そこから僕らが被差別部落と僕達
との関係についても、単に差別されてる人間
と差別する人間という単純な二元論で語つて
しまふことは、とてもおかしい事だと思つし
僕達は別に差別している訳でもないんですよ
ね。そうかといつて、観念的に社会が差別し
ているから僕達は関係ない、という形で話を
して、いつてもやっぱり誰しも切実な問題とし
てはとらえられないと思つてますよ。ね。
大学の中で学問をして、或いは友達関係男女
関係、読書、そういうものが僕達にとつて日

常、切実なものであると思わなければならない。やっぱりさういう中で僕らはちよつとした問題を感ぜると思ふし、僕達が受けてきた教育と今ある日本という社会が、大きなギャップがあるってことを、感覚、感性のレベルでとらえていくことができると思ふんですよ。それを自分の内題としてとらえていく時に、日本という社会或いは世界というもんが内包している問題として被差別部落の問題なり身障者の内題なりが浮上してきて、ひとつの普遍性を僕らは獲得できるんじゃないかなって気がするんです。パターンとしては10年前或いは20年前、或いは戦前の日共あたりでやってきた、下層労働者に対して、助けなきやいけない」といふパターンは確かに旧いかもしれないし、今さういう事やっても誰も集まっこないっていう現実があると思ふんです。しかしそれは既にダメになったパターンじゃないんじゃないかという気が僕はするんです。今ダメだからといって将来ずっとダメであるわけじゃないんじゃないか。マルクス主義ならマルクス主義の世界観ってのは、マルクスが彼の生まれた状況の中で、切実な或いは日常的な問題から格闘していった、その格闘した跡みたいなものがマルクス主義って形での文献で残っていると思ふんです。だから僕らが一挙に飛躍して彼の思想を受けとめようとしても、僕らが現実の問題に対してひとつひとつ具体的な格闘していかない限りぬ

マルクスの思想なんか絶対理解できっこないと思ふし、さういった形で戦前の日共、或いは今の新旧左翼の諸君がやってる、最初に世界観がポイントとあってだから自分達は何かしなければいけないって、一つの教条的な形での運動っていうのは絶対もうダメだっていうような気が僕もします。僕らが知ってる世界、これは余りにも無意味的に僕らの胸の内に入ってきてしまつて、そこに何らかの感情ってのが無いんじゃないかって気がします。

司会 いろんな形で、こういう風にやっていったらというふうな事も言われたんですけど、実際にさういうふうな提起があるにしても、結局我々の多くがさういう形で現実にはなかなかがやっていけないってことがあると思ふんです。その辺の事も含めて少し意見を言っていただきたいと思ひます。

□ 実際に身体障害者に接して

G さっきの小山君の言った事に関連して、楽しければいいと言、た人に質問なんですけど、あなたはセクトの人とか原研研の人とかを、楽しくやってるからそれでいいというわけですね。だけど、楽しく生きられない人はいったいどうすればいいのかわつてことがあるんです。それは気分的にはなくて、例えば部落差別の話が出たし、水保病で本当に自分の生活の中で切実な問題として公害におか

れている人達の環境に對する座り込み運動とかは、さういうことを楽しくやっていられるからいいって言えるのかなって思ふんです。楽しく生きられない人達のことをあなたの論理で言えば、それは皮肉で言っているような気がするんです。

それから、かわいさうだという気持ちでは、どうにもならないという話が出たんですけど、身体障害者のことについてちよつとさういいたいです。僕は今、和光大学に行つてますが、和光大学は建て前として身体障害者を全部受け入れてるわけですよ。大した設備はないんですけど。だから全盲の人もたくさんいますし、耳の不自由な人も沢山いますし、車いすの人も沢山いるわけですよ。階段のところにくると、車いすの人は声を出して、運んでもらったりするわけですよ。僕は今までさういふ身体障害者に直接立ちあつたことがなかったんで、最初学校に行つたときにどうしたらいいかわからないというか、かわいさうだという気持ち以上に戦慄してしまつた感じがあるんです。行動としては階段のところに来たら持つてあげたりしたんですけど、最初非常な出会いのショックというか、さういうのがあって、その次にこれで決定的になつたんですけど、うちの大学の教授に障害問題をやってる人がいて、その人のゼミをとつたんです。子供たちの現在」という題で子供の自殺についてやろうってことになつたんですけど、

クラスに、目の不自由な人が一人いまして、今までレポートは、ボランティアの人に対面朗読とか、テープにふきこんでもらって聞いてたけど、人の声が入ると、読めないっていうんですよね。つまり、人の声ってのは感情が入るでしょ、俺たちが本読むのと違うわけですよ。だから、もし私を受け入れてくれるのなら、みんな点字を学んでほしいっていうわけですよ。点字で私にはし。レポートを出してほしいっていう提起があったわけです。そのことで討論が結構続きました、やっぱり時間の無駄だから、なんとか対面朗読でがんばんしてくれないかっていう問題と、とりあえず点字やってみようという二つのことがあって、あまりにつきつけられた問題の重さで、もしこれにかかわったら二庄そのことをやめていかなくちやあいけないんじゃないかという強迫観念にとらわれて、先生の前で田代はどう思うんだって聞かれた時は、次の週までに考えますと言ったにモカかわらず、次の週、どうしてもモ体がそっちの方へいかなくて、結局このときは出なかつたんですね。ところがそこでひとつひっかか、七問置ったのは、やっぱりかわいそうだって気持ちがあつたんです。すごく、だから必然的に次の日に教授の研究室にいった、最初かわいそうだし、ようがないからやめたって言ったんですけど、そのピミを、そうしたら自分で問題提起をしておきながら、その週出なかつたことと、モ

う一つそういうことにかかわらなかつたこととまるんことができなくなつちゃうみたいなきんががあつたっていったら、一番はじめどう感じたかってきかれて、かわいそうだって感じだつて言つたらだつたら点字を学ぶことぐらいどうってことないだろうみたいない言ひ方されて、結局僕は点字やって、ずっとやってみるんですけど、やっぱり一番最初にあつたのはシヨック、その次にシヨックからかわいそうになつて気持ちになつて、その次に自分の中に入つてい葛藤があつて、今はわりと乗車椅子の人達とモ目の不自由な人とも本当に乗車椅子あえるようになったつてことがあるんです。だからやっぱり一番大事なかわいそうだなつて思ふ気持ちには、十こつ彼が言つたように、小さいころからずっとそういう教育受けてきて、そういう気持ちになるのは当然だつて思ふんで、やっぱりそういう気持ち切り捨てられていくと、何かにうちもさうちもいかなくなるような気がするんですけれど。

□ 運動の方法論の模索を

高橋 とうとう事じたい大事なことだと思ふんだけども、とうとう事にタッチして入る人はものすごく、うったえる力あるけども、タッチしてない人ってのはそれ聞いて、ああそうだなつて思つちゃうつてところがあると思ふんで、これに出て下さいつて小山君から言われた時、ひとつの方向性を見出したいみたい

な事を彼が言つていたんで、考えてたんだけど、結局、昔はオフィシャルな面、っていうのがものすごく強調された世の中だつたつて思ふんで、それが所謂8月15日つてのを境にして、所謂大逆転つてい感じになつて、その反動的な力もありつて、パーソナルな部分つてのがものすごく強調されてきた時代になつたと思ふんです。その一つの過程に、安保なりがあつたと思ふは考えます。これからの僕たちにとって必要なのは自分達のモッてるパーソナルな中にオフィシャルな部分をもどうやって、音でつていくつてことがすごい必要だと思ふんです。そして、オフィシャルな部分をどうやって維持していくか、つてことがすごい必要だつて思ふんです。音でつていく過程においては、今まで話されてきた差別なりつてものを考えたいかねばならないし、そういう意味での方法論つてのを立てていく必要がある。その為には、かわいそうなのが話が出るけど、何がかわいそうなのかつて事を考えてみないといけないと思ふ。手足が不自由な人たちが動かない事がかわいそうなのか、あるいは社会から差別されてくることか、そういう目で見る人が多いつて事がかわいそうなのかつて事を考えなきゃいけないと思ふんです。おそろく後者だと思ふんで、そうなるよ。それこそ僕らの意識次第でかわいそうだねつて感覚は消えてくはずだと思ふんで、そうしような観点から、自分の中に

オフィシャルな部分を作っていくってことを考えてかまやいけなと思う。それから維持していくってことなんだけど、否応なく会社なりに入ってく人が多いと思うんですね。その中で、あれだけ、今思っていることなり、感じていることなりをキープしてけるかってことが、この大きな問題だと思っんです。ある意味で、僕らは言いたい事が言える身分ですよ、学生ってのは。その時にもっている感情なり、パッションみたいなものをどれだけ社会に出さ、キープしていくことができるかっていうのはすごい今の僕達と違って、とまあ大きな問題なんじゃないかと思うわけですよ。例えば僕なんかでも将来は医局に入るわけですよけど、所謂医学部の世界ってのは社会の中でかなり高いレベルで封建性が強いところですよ。今持ってる感情なり気持ち、それがどういふものか、自分でキープして整理はされてないけれど、とまあ、そういうものをどうしてキープして行くかって事を考える事ってのは、すごい重要な問題だと思っんですよ。それと、ここに來てる人達なんかで、ちがう人はいると思っすけど、ある程度、心の中であらうものは、かなり同一性のあるものなんじゃないかと思っす。一番深いところに行っちゃうと、所謂今の状況はまさにどういふ共通認識があるんじゃないか、って反がそのすくするわけですよ。ここに

しくやってる人達の中でもそれが非常にあると思っわけなんですよ。こうやって話し合ってる人達ってのはみんなある程度もってるんであって、もってる状態が今普通じゃないかと思っす。昔、それこそ、学生運動がはげしかった頃、政治なりに熱中してたような雰囲気、非常に後退してるともいえないけれど、ある意味で非常に根の深い所であれ、あかしのいんじゃないかな、今の状況は、ちよとやばいんじゃないかと思っす。感覚があると思っす。そういう感覚を一遍に統一されるとは思われないし、統一されたり危険だと思っす。そういうもの、ワソソというところからいみ出てくるようなもの、フのキョかけみたいな物を何かがすべきだし、作るべきだと思っす。僕の持論から言っると、今の世の中で、既成の世の中でいって思われてるものの中からはあんまり出てこないんじゃないかと思っす。例えば、東大なんかでいうと、所謂エスタブリッシュメントのタマゴさんたちが一杯いると思っす。だけど、そういう中で小山君たちみたいに、こういう、ある意味で異端的なことをやってる中から何か出てくると思っす。そういう意味で視野を狭くしないで、みんなもってて、そういう感覚ももって、その中から何かきっかけになるか、ってことをさがしていく事が、必要になるんじゃないかと非常に思っす。

司会 色々意見が出てきまして、個のレベル、自分自身の身の回りっていう意見がある程度強いようです。その一方で、現在ある学問なり、思想なり、客観的な判断なりに重きを置く方もいらっしゃるようです。廣松先生に対する賛同などでもかなり出されましたので、この辺で先生に少し意見を言っただけでいいんですが、いかがでしょうか。

□ 結社による大状況へのコミット

廣松 永山問題が出ておまして、それにいちいちコミットすると、私は長広舌をふるう方ですから長くなりかねないんですが、後でもう一回、場合によっては二度、三度ほど発言の機会を与えて頂くことにしてですね。今、とりあえず高橋君から出た問題にちよとコミットして話題を広げさせていただければと思っす。本当に元ほどこから、困ったなと思っす。何か自分で主体的な発言をしようとする、何か弁解がましい事になりかねないという危険の念が一方であるし、あんまり主体的な話でなくて多少客観的というが、第三者的な話をする、まるで評論家的な意見になりそう、という両断崖の危険の念を持つんですけれども、私、今、高橋くんからの、オフィシャルな問題と、個人的な問題という、両極が話が出たんですが、ここで、オフィシャルという概念にいきなりいかず、或いは組織という概念にいきなりいか

ず、もう一回個人ともう少し広い所を
なく途中の問題として、しいて言葉を使えば
結社とでも言うような媒介を入れて考えてい
いんじやないかと思ふんです。ところが今日
の話のしよっぱなからセクトに対するアル
ギーがびつとでちゃったまんですから、そ
ういった結社っていうような次元の話がほとん
どブキない雰囲気になってしまつた。その上
に、うしろの方ですわつてうらっしゃる巨さん
これはかなり意識的に挑発的な発言だと思
うんですけれど、すへての理論も理想もダメだ
という言い方をされて、それで理論も理想も
ダメで、それで結社もダメだつてことになれ
ば、本当に個人の次元でどうするが、それか
ら自分の感性に則した所でどうするかという
ことしか議論のしようがない。何かさういう
土俵設定になつてしまつていゝ思ふんです
か。ちよつとこの土俵そのものを、もう一回
検討してもいいんじやないかと。

確かに今日みたいな状況になりますと、最
初の小山君の基調発言の表現を使って言えば
「夢がない」。小山君は夢がないという消極
的の言い方をされましたけど、今まで夢と言
われたものかすべてダメなんだというもう少
し強い意見もある。そうなんですかやはり我
々は夢を求めざるを得ない。単に求めざるを
得ないというよりも、少し身の回りを考え、
もう少し広い所に視点を向けていゝた場合に
は、やはりこのままではどうしようもない。

そして、どうすべきかというところが問題にな
ると思ふんですね。さういうところの中で、
今日の御発言、本当にみんな主体的に自分一
人でどうとり組むか。さしあたり自分ど
う取り組むかという所にアクセントがあつ
たんですが、これは出発点としてはその通り
だと思ひます。ですがこれがもう一歩話が進
んでいつたら、単なる個人の次元での著り集
まりで社会が成り立つてるとは私を思ひませ
んし、特に運動という事を考えていくには、
個人と全体という次元では話にならない。既
成の結社、てものに満足できないことと、一
般論として結社というものかいいないんだと
いうこととは別だと思ふんですよ。私はやは
り、我々が今求めたいかざるを得ないのは、
夢のまた前提がもしれないけど、少なくとも
向か行動したギヤならぬという事が起つて
きたら、それぞれの次元でやはり結社とい
うものか追及されざるを得ないだろう。今結社
といひましたけれど結社には非常に又かがり
な結社から、サークル次元の結社まで色々あ
ると思ふんですけれど、何か単なる個の次元じ
やなくて、もう少し連帯性を、どの様な場面
で作つていくのか、これに考えていひだろ
う。

この事を言ひましたのは、今日会場から、
最初に東京女子大のAさんの御発言の中に
すね、全共闘の時代の話があらまして、あ
そこを、セクトと全共闘、ま、一般暴力学生
との間を区別しなけりやならぬいだろうとい
う事をおつしやりました。確かに事柄として
さうだつたと思ふんです。ですが全共闘世代
の人のセクトに対する姿勢は、恐らく今の
多くの学生の人の姿勢とは違つたと思ふん
です。それは私、全共闘世代の人は皆がすべて、
抽象的に、固有名詞のつかないセクトとい
うものに対して、フランスの反応を全員かしたと
はいひません。いいませんが、おそらくです
ね、私、非常に多くの人は、セクトの活動
家に対するコンプレックスもつてたと思ふん
です。はつきり言つて、つまり何が本来かは
わかりませんが、少くともさういふ運動
をやつていく以上は、かなり明確な組織的結
集体というものがアンカーをさすと言いま
すか、主体的に参加していくといふことでし
か、本当は運動は推進できないだろう。た
自分今のとらう、そこまですみ切れないと
いふ、ネガティブな人が多かつたんじやない
かと思ひます。それの中には初めからセクト
に対するアルギーを持つた人もいゝと思ひ
ますし、非常に積極的に、既成のセクトに對
しては満足できないといふ形の人もいたと思
ひますけれど、一般論として、ちよつと今とは
違つた構造があつたんじやないか。その限り
私としては、一般的な構造としては結社に主
体的に参加する。あるいは結成することによ
つて、どう世の中にコミットして行くかとい
うことか、最初のベースとして考えられてい
いだろう。その次元まで考えると、この話

で、自分個人でどうとり組むかという所から発想するために、あまり大所高所の話をしても始まらないということで、自分で切って捨てる。色々矛盾を感じたり、問題を感じたりしていても、それはやはり情報でもって、もたらされたものだという形。私にいわせると、恐らく自己欺瞞的に一遍押し付けようとする。そうじゃなくて、結社ということまで計算に入れた上で、それが現実に対して我々どうコミットしていくかという事になれば、現実に対する見方、情報に対する応対のしかたという物も違ってくるだろう。こういう風に思うんですね。こんな抽象的な話してもしかたがないんで、本当は、じゃあもう少し具体的には、私としてどういう事考えてるのかという事をお話ししなきゃならぬ。順番なんです。ここはもう少ししみ方さんのデイスカッションをうけたまわった上で、私たちの議論もしたいと思えます。その中で旧全共闘の問題、知と生の乖離を三項目にわけたおっしゃった様な事にも、私としてお答えしていきたいと思えます。ヒリあえず第2のアイテム、つまり理想社会をすぐ作るうとしたという形。おっしゃった、アナーキズムとあり通ずる様におっしゃった点に關して言えば、これだけやはり60年代の全共闘運動というものの自身が、今の私のいい方からすると、結社らしい組織という様なものを持っていて、その中で社会全体のダイナミズムにど

うコミットしていくかという点については充分議論もつまっていない。たし、運動の局面もつまっていない。たし、という事が関係すると思えます。これは60年代の全共闘運動を前向きな姿勢で総括するというか、評価するといった場合には、当然考えていいアイテムだと思ふ。そういう事で、今抽象議論ばかり申しましたが、先ほどから出たいくつかの一言には、それぞれの接点を持って私なりにコミットするつもりなんです。具体化はもう少しあとまで待っていただきたい。

□ 結社とコミュニケーション

司会 これから話の方向性を先生のおっしゃった様な事もありますし、お考えになつて来る事も自由に出していただいて結構ですが、一応ある程度、我々間のコミュニケーションというものは、我々時代錯誤社でも常に考え続けてきたことですので、できればこの辺のご意見もいただければありがたいと思えます。

D 先生は今、結社について話されたんですけど、その前に必要な事が一つあると思ふんです。先ほど後ろのEさんが自分自身の回りがまず大切なんじゃないかと言われたんですけど、自分自身でことなんです。実際にはたして自分について、どれだけの知識をもっているのか、つまり、自分が何か欲しているのは実は本当に自分に内在

的な問題を自分で見つめ直して、しかも自分の20年間なり何年間なりの歴史の中で、こういうものが自分が必要で求められているものなんだ。それで、どうやって実現すればいいのか。そういうような継続した視点でとらえているのはびくく、實際何をしたらいいのか、という時に、自分が求めるもの、っていうのが何か感性的にまずある。そういう自明のものとして色々いってんだ、そういう気がするんです。ずすから、そのへんのところをもうちょっと考えてみる必要があるんじゃないか。先ほど高橋君が何か非常に具体的な学問の問題について言われたわけですよ。だけど、そういう問題でいうと、その中で、そういう封建的な学者の世界で、自分がいったいどのような態度、行動原則を維持していかか問題になるわけです。また、実は現在のマス・メディアっていうものは、何を求めているのかはみんな大体同じようなものなんじゃないかと錯覚させるような力も持っている。そういうことをまず忘れてはならないんじゃないか。

それから最初にセクトの問題ができましたが、結局それはみんなが目にし、感情をもてるということ。議論の端緒にしたいと思えます。結局、身障者の問題にしても何にしても、人間には余りにも共通した同一性がある。それでどうしたらいい、とかあまりにも人間の同一性、共通性を自明の論理としすぎて

のではない。人間性には勿論共通なものはあるわけだけど、実際にどういふふうに動いていくかというようなどころではかなり違ふ。だから個人個人の違ひといったものを重視して、その中で個人の行動をみつめ、やはり一人では難しいということ、なるべく共通性の多い人と共同していく、そういうったものが「結社」につながると思う。だからもう少し自分の感性、理性、そして両者の間をつなぐものに対して対自的になる必要があると思ひます。

丁 今の方が対自的にと申されましたが、我々はこれから社会に入っていくかなければならぬ。大学という社会もそうですし、一般社会もそうです。とにかくそれに必然的に入っていくかなければならぬ。そういうた中でいかに自分を保持していくか、例えば環境問題をやりたいという人がいたとする。と、しかも、公衆研では実際に住民運動に關系する問題は一切扱つてはいけない。そのつち中で始めの自分の考えをキープしていきけるのか、という二つになれば非常に問題だと思ひます。さらに話を抜けて、我々一般文學人として考えれば、大学を出て、無意識的に社会の中で差別者となつてしまふのではないか。つまり、社会という二つを扱つて、自分個人という二つについて考えようとするのは、問題が捉えられていないように思ふ。先達全共闘の語が出ましたが、全共闘の学生がどのようにな

てセクトに入ったかを、個人的興味から讀んでみましたか、動機とか、どのセクトに入るかなどは偶然的な要素も多く、必ずしも思想によるものではないらしい。自分が差別者になつてしまふといつた正義感から出たものもあつたように思ふ。そして我々が全共闘を考へていくうえで、全共闘を全面否定してしまふ。初めの方では非常に否定的な意見が効かつたようだが、全共闘の呈示した問題は、我々の切実な問題を少し抽象化したものだから、さういふ面を考へなければならぬ。それに現在の新左翼セクトのことを考へれば全面肯定もできない。

□ 自信をもつことこそ

E 話を先生のおっしゃつた「結社」の問題に戻しますと、これをもう少し明瞭に僕なりに定義したいと思ふんです。先生は確かに「組織」と區別して「結社」を出されたと思ふんですが、それはこういうことだと思ふんです。例えば、僕がある人と友達だつたとして、その人以外の人は僕の友達ではないといひます。しかし、その人との關係においてのみ僕はその人と友達なんであつて、そのことは他の人々をその關係において排斥することはないですね。もつと考へると、僕に恋人がいるといひます。今はいませんけど、その時僕とその恋人の關係はさうでない他の人々との關係を排斥することはないですね。とこ

ろかパツと五人くくつて、これが組織だといひます。組織というものがあつるとすると、それに入つていくとか入つていないとかで人を區別してしまふわけです。入つてない人には「入れよ」とか「おまえは入つてないから駄目なんだ」とか、さういふことになりまふ。でも、もつと有機的な人間と人間のつながり。例えば「お前はくだらぬいやつだから好きだ」とか、「お前はアホなこと言つてるやないか」とか「結構オモロイこと言つてるやないか」とか「みたいな形でワイワイガヤガヤ集まつてきたら人といふのは結構その中が色々なことをやつていても、別に「他の奴は俺達と違うから駄目だ」とか「他のやつも俺達の中に入らなやないか」とかさういふた発想は持たないと思ふ。だから恐らく先生のおっしゃつた結社というのはさういふ形で人間同士が自分の思想的過程、人間的過程といつたものから自然と集まつて來て、何となくチャランポランに、それでもしつかりと何かやつていくという人間關係にすぎない。しかし、それに入つてない人間を排斥するわけでもないし、入つてない人間に無理矢理入れというわけでもない。さういふ形といふのが結社といふものだと僕なりに解釈するわけですね。まあそれは御意見をうかがうとして、ごほういふた結社といふのはどうしたらできるといふか。それは一人一人の人間がもつと自立していなければならぬと思ふ。そ

の自立とはさっきのHさんが言ったように、もっと対自的になれ、とか、自分がどういうものなのか。自分はこういう方向性を持っているのか、もっと意識的になれとか。そういう人が多いわけです。しかしそれではビビッているといえますかね、自分が持っている情報やマスコミに操作された情報だからヤバイんじゃないかとみんなビビッてますね。それから自分の考えは浅いから、もっと深く考えなければ何もできないんじゃないかとビビッてますね。しかし自分にとって切実な問題、自分のいまある位置についてのもうそこではないんです。マスコミに操作されようとしていて、問題意識なり、自分の持っている判断の基準、そういうものはそれでしかないんです。人間というのはそれに責任を取らなければいけないんです。それはそのうちヘタな会社に入っ、てころんでしまうかもしれない。そんなことはそのときになってみなければわからないんじゃないですか。今持っているもの、思っているものに自分として責任を持つ、たかどうかと思うんです。責任を取るという事は、今の自分に自信を持つということですよ。もちろんこれは自分が超人だと思ふことじゃないですよ。自分は矛盾をかかえてそれを解決しなければならぬ。しかしその点における自分のすべてというものはあるはずじゃないですか。それに対して責任を持たなければなら

りません。それに対して責任を持たなければなりません。その責任をもつという事は、自信をもつということですよ。そういうた形の人間が集まることでしか結社ができないんじゃないでしょうか。どこかビビッていて、もし何かものすごい議論が出てきたらそれにとびついてしまう。どこかビビッていて、もつといいものの考え方が出てきたら、自分の連続的な思想的過程を飛び出してホイホイすつとんでいってしまふ。そんな人間達が集まったら、結社はできません。組織になつてしまふ。

最後につけ加えますが、さっきHさんがおっしゃったように、身体障害者の問題にしても、やっぱり人間は一人一人違うんじゃないかという点も、確かにあると思います。しかし僕も言った、身体障害者と同じ人間じゃないか、かわいそうなんのは駄目じゃないか。というのは、僕とあなたか違うように、僕と僕の知ってる身体障害者、色落ちのおっちゃんですけど、そのおっちゃんとは違う、という意味で、人間はみな同じなんです。そういうに承認なんです。まあそれはいいとして、結社の問題、みなさんどうお考えでしょうか。

□ 全共闘、自己否定とは

A どうして自分に自信を持つと言っているでしょう。何か自己肯定が過ぎるといふか。さ

っきEさんが「10年前か何ですか」とおっしゃったんですけど、私は10年前をふり返って「あなたの時代は良かった」とだけ懐古的に全共闘の問題を出したのではなくて、全共闘の呈示した問題が今日においても新らしさをもつと思います。全共闘は「自己否定」という問題を提起しました。そんなことはあなたに言わせればビビッてて駄目なんじゃないでしょうかよくわからない。

E すごく誤解を受けていて、こういったものの言い方をするとすぐ悪者にされていやなんです。自己否定、自己否定と、何かファクションみだりにいうのは駄目だと思うんです。しかし僕が言った自分の意見に自信をもつということ、その時点における自分の意見に自信を持つということですよ。しかし、人間というものは不完全なもの、その中には必ず矛盾・間違いがあるはずですよ。ただそれを正確に見る手続きが自己否定という形を取るかもしれない。それはその時です。

H 先ほど誤解を受けたようですが、まず自分についての知識を持つことが必要だといったのは、別に自覚的な差がどうのこうのという意味で言ったのではなくて、自分と社会という二つの極の種極的な関係として行動があるわけですが、そうした行動を選択していくためには、まず社会についての知識を持ち、自分についての知識をもつ、それによって初めて自分にとって正しいと思われる行動が

選択できるわけです。ですから、あくまでそういう意味で言ったわけで、決して自分について思い悩むということをやったわけではない。人間というものは不完全なものですから、いかなる思想にも矛盾がどこかにでてくるわけです。また自分を支配しているのは必ずしも単一の思想ではなくて、いくつもの思想の混合したものが自分なりの解釈によって結びあわせている。そうして実際に行動していくわけです。ですから、あくまで自分の中の矛盾を認めつつ行動するということは、僕は否定するつもりはないし、またどうでなければ結局は何も行動できないことになってしまふ。

D 最初に私が質問しましたが、あれは僕が何も全共闘的論理にいかれちゃって、それで質問したというよりは、むしろ10年前の時点に立ち返ってみて「仮に」という感じで質問したんです。

さっきからの議論は、Eさんと他の人の2つに別れているようです。Eさん以外の方は、全共闘をどう考えているか知らないけれど、Eさん以外の論理は僕から見れば、みんな全共闘の論理だと思ふ。つまり、今の社会には矛盾がある。差別なら差別というものは何らかの形で自分は加担している。だから、運動しなければならぬ。あえて単純化すればそういう論理だと思ふ。それに對してEさんは、ある思想家の論理と極めて似ていると

思ふんぞすけれど。今の社会には差別なりなんなりがあるわけですよ。その解決としていろいろの運動があり、その最後の形として革命というものがあるわけですが、Eさんは、そういった差別などの矛盾を解決すべきだと考えているのか。解決すべきだと考えるなら革命なら革命への道をどのようにつけていくのかをうかがいたい。

それから廣松先生に。先生は独自の革命論をもっているらしいやうなわけですが、現在のほくらの状況を見てみると何かあつても立ち上がれないんじゃないかと思われるわけだ、そういった事に対して、どうお考えになるのか。

B 今までみなさんの言っていることはよくわかるのですが、しかし、その中でみんな何をしているのかという事が全然わからぬ、ということがあるのではないですか。例えば全共闘をどう評価するか、評価をしているに過ぎないのが、今の議論の段階ではないのかと思ふわけです。何をなすべきか。自信がないからやらないとはEさんは言わなかったけれど、ビビッててしないということはあると思ふ。でもその中でいかに見切り発車して何かすべきことをしようか、またしたかという事を議論の中に織り混ぜないと話が見えないのではないか。例えば、いろいろな理論を出して、その中に身近にあることをかみ合わせて、自分はこのことをしようとしていくとか。

例えばサークルにしても、その数はめちゃくちゃ増えている。何故そうなのかといえば、仲間うちでやるうという事が多い。一つの例を出せば、テニスのサークルですね。これは今、駒場には死ぬほどあるわけです。何故、そういうサークルが沢山できまきたかといふと、今既存のサークルでやつてつてもいいんだけれど、気の合った仲間だけでやりたい、そういう感覚が出て来たグループだつてあるわけです。それは「結社」とは違うんじゃないか。しかし、それもまた一つの「結社」である。その辺にある矛盾を見出していかねばならぬのではないか。それを現実にあつてはめて話していった方がいいのではないかと思います。

K 僕は法政大学の通信教育をやつていて、昼間は公務員なんです。法政大学の通信教育のスクーリングなんかに行く、こういった感じじゃなくて、おじいさんもいるしおばあさんもいるし、身体障害者の方もいるし、子供をかかえて、子供を附屬の保育園に入れて勉強するそんな感じなんです。

今日駒場に初めて来て大学祭をみてかっかかりました。何か高校の文化祭と同じじゃないかという気がする。高校生にある程度金があつて、煙草や酒がのめるといふ社会的規制がなくて、そういう意味での自由があればこの程度のことでは済むのではないか、という気がする。高校と大学というのはどこが違

うのかと言え、学問のあり方だ。高校の時僕らは先生から学問を教えられる立場にあったと思う。でも大学生っていうのは違う。通信教育ではとくにそうなんだけど、学問を自分からつかんでいくという形であると思う。

その辺の違いが今の大学生にはわかっているのかなあという気がする。10年前の学園紛争には学問が教授と学生のどちらの側にあるのかという対立があったと思う。それから先程からの自己否定の問題だが、学問がどちらの側にあるか、という態度で接してきた学生っていうのは、自分を変えることのできる人間が世界を変える、世界を変えることのできる人間が自分を変える、という形に立っていったと思う。まあバリストなりピケストなりには僕も参加したが、中に入って来て怖いんですよね。機動隊が来るんじゃないかと、早く逃げたいなあとか、つかまったら、母さんが泣くなあとか、そういうことを考えながら、オロオロしながらやるわけですよね。そういうことがある意味で自己否定なのではないか、決して楽しくやっているわけではないんですよね。そういう意味で自分を変えることのできる人間が若者なのではないか。

□ コミュニケーションの欠如

司会 今色々議論が出て、若者は何かという議論は余り出ていなかっただけですが、

先生の方から言われた「結社」という考え方にそれに対する色々な考え方が出て、個人を重視する考え方、学問にこだわらない考え方もあると思いますし、また、仲間うちでかたまっているという問題も現在あると思います。我々時代錯誤社の中でいろいろなことを話し合ってきましたが、結局、現在我々は横のつながりを余り持てないのではないかと、という認識があるわけです。もっとも今日、この場でもなり多々の方々に発言して頂いて、我々としては大変嬉しく思っているわけですが、仲々という機会も設けられないし、我々がいろいろな人と積極的に意見の交換をするという機会も、ごく狭い内輪のサークルなど以外では失われているような気がします。そういう状況を何とかして切り拓いていきたいというのが我々の考え方なんですけれども、その点に關して、現状に自分自身としてどのようにコミットしていきたいかという意見があったらうかがいたいと思います。

本田 今の司会者の発言をうけて、自分はどうしているか、ということも話します。

曰大の場合、個々の学部が検問という形で分断されている。経済学部という建物がある中でその中に一人近い学生がウロウロしているのだけれど、ごく基礎的な単位であるクラスにしても、3、4人で麻痺に行ったり、パチンコ仲間がいるということはあるが、クラス全体で何か話して決めていくことが、み

んなで遠慮にしていることにはまっぴりない。その一方で大学が全共闘の歴史なり何なりを、隠蔽したり、歪曲した形で学生の方に一方的に注入してくる。そういう現状に対して何かしようということ、恒河砂みたりな感じのコミュニケーション紙を月刊ベースで一応やってきた。僕たちとして一方的にアジるつもりはなくて、生活の場というのを握り取って、その中から切実な問題、例えば、検問であるとか、検閲制度であるとかに、何らかの形でアプローチしていくのではないかと、現状を少しでも流動化、活性化していくことではないかということ、そういう新聞めいたものもやってきた。三才部で、この間、十八回位出してきた。その間にどういった反応があったかというところ、投稿の数も非常に少なかったり、かっかりしたわけです。検問や検閲なんかは問題になっていないのか、といえはそうでもない。例えばアンケートなんかをとると、過半数の学生が撤廃した方がいいと考えている。しかし、今一つ行動の契機がない。身近に何人かが集まってやっていく、という行動には今一歩踏み出せない。或いは、毎日学生証をチェックされていて、一年生の頃は非常に「何でこんなものがあるんだ」という形で疑問なり怒りってものがあつたんだけれど、そういうった感性的なレベルもだんだん、加速度を帯びる形で、麻痺してしまっている。これではいけないということ、感性的鈍化に対

切実感をもった問題としてあった。しかし、そんな抽象的に近代合理主義の克服だ、人類史の転換点だとか言っても話にならないわけで、そこで60年代末の全共闘運動は少なくとも政治の問題としては70年の安保闘争の問題が計算に入っていた。そうだった次元で大きな状況というものを考えますと、私はこの際に、あの当時ノンポリと言われた人達がかなり新左翼系のセクトに対してコンプレックスを保持していたらうと言ったのは、少なくともセクトの人達は将来的な、それこそ人類史的な展望というものを本人は持っているつもりでいる。その際に新左翼系のセクトの大きな特徴は、既成の社会主義国、例えばソ連圏というものに対して決して無条件に賛成してゐるわけではない。社会主義には賛成だが、かゝり付き「社会主義」には賛成しない。これは50年代末に形成された新左翼系のセクトの場合にはトロツキズムの影響もありますし、60年ブントの場合にも、これは諸君が腹を抱えて吹き出すかもしれないけど、彼らのシンボリックな表現によれば日本革命によってモスクワとワシントンに同時に乗り込むんだというふうな、つまり先進道国における革命と、今の既成の社会主義をどう変えていかなければならないのか、といったことがあった。そしてそれにはスターリン主義に対する批判ということがある。それも、スターリン主義がいか悪いかとかいうことではなくて、何

故ああいうふうなもの、つまりかゝり付き「社会主義」というものができてしまったのか、ということの了解があつてできてきた。

それに対し、今の「シラケ世代」と言われる人々の場合は、その後のプロセスがあつて、少なくともベトナム、中国の文革に対する非常に大きな思い入れがあつて、それとの関係があつて、何か思想的に全部駄目だというような意識がでてきたと思うんですが、ベトナム問題についても、例えばベ平連なんかでやっていた人達と、セクトの人達と、それから普通の——さっきのAさんの言葉を言えば一般暴力学生と言われたような全共闘の大多数の人達にしても、大状況的に物を考えているという人達の場合には恐らくベトナムの問題についても、中国の問題についてもそんな単純な思い入れはしてなかったと思うんですね。そういうことの中から議論がでてきた。ところが最近になってまいりますと、かゝり付き「社会主義」がいけないんだと言うただでなく、社会主義そのものがいけないんだという話が出てきている。私はこれには単純に教条主義的に反発する気はありません。それは、かゝり付きが本来の社会主義の理念からはずれているといくら言つたって、それだけでは始まらないで、何故こうなつてきたのかということを考えなくちゃいけないと思うし、同じ資本主義と言つても19世紀の前半あたりから考えられた資本主義のイメージと現在の資本主義とは非常に違つてきている。そういうことも計算に入れた上で、今度はその社会主義の側でも対応の仕方も変わつていなければならないだろう。対応の仕方が変わるというのは、単に相手に対する対応の仕方が変わるというのではなくて、自分自身が主体的にどう将来的な展望を出し、具体的な方策を出していく、そういうことになつていくと思つていくんですね。で、そういうことの生みの苦しみというのがある、というのが現在の状況だと思つてわけです。これは、生みの苦しみがあるといふことでホジティブに評価するのかが、生みの苦しみと言わざるをえないような状況が非常に長いこと続いているということ、ネガティブに、絶望的に感じるか、というように感じ方はいろいろあると思つてますが、ともかく私は、大きく言つて今、人類史的な一つの転換点に来ている、これはもうはつきりしていると思つてですね。で、特に公害問題とか原子力の問題、人口問題、資源問題とかいうことであつてゐる。しかし、普通のジャーナリズムでは、ある時期までは割と深刻ですよというふうなことを言つておきながら、ちよつと経つと、そうでもないと思つてゐる。ところがドルと円のレート一つを見てみても、これはそんなに簡単なことではないだろう。もう少し大きな状況を考えるならば、我々はそうじつとしていられる事態ではないだろうと思つてですね。そういつたような大

きな状況を我々はどうか考えていくか、そういうことだからしか問題は出てこないだろう。そして、特に大きな状況からの問題というこゝでは運動はおこりにくいと思ふんです。それは自分自身の日常的な感性の場面でピンピンと響いてくるような問題、特に被害者意識が強く感じられるというような状況であれば、日常的にも運動はおこりやすい。それに對して、やや大きな眼で見れば危機的な状況であるとは言いながらも、さしあたってはそれ程危機感を感じさせないようなぬるま湯的な、「ドツボ的状况」と言うのか何か知りませんが、こういう状況の中にいると我々はそういうことをあまり考えないですんでしまふ。ですけど、これは考えた人達が、さしあたっては一人、二人で始まるかもしれないし、また誓約集団と言つても全部新しくつくらなければならぬということでもないかもしれない——小さいけれども既にどこかにあるかもしれないし、或いは相当大きくあるのかもしれない——そういうことの中でどうコミットしていくか、ということとこの関連で、先程の質問に、こういう状況の中で前衛だ、結社だということも考えても絶望的にならないかというのがあります。個人的な話になるようですが、私は終戦後間もない時期に左翼の運動にコミットしましたが、田舎におりましたので、そこでは、おまえら天皇制打倒

なんていうけしからんことを言う非国民だ、もうおまえらとは口きかん、というような状況だった。そうした中で、マルクス主義者の運動はずつと行なわれてきたわけですし、50年朝鮮動乱の時も実際にレッドパージもどんどんおこったわけですし、その就職なんでものもだいたいできません。それで大学出の活動家にはくす屋さんなどをやつて生計をたてていた人もいた。そういう積み上げの中から結社というものは大きくなつていくし、一定の大衆性をもつてくる。そんなもんだらう。ただ、その場合に単に一对一のコミュニケーションの積み上げの中で前衛というものが大きくなつていくのかと言つと、私はそんなもんじゃな思ふんです。運動自身は一つの波をもつていて、一定の極面で飛躍的に發展する。そういうった飛躍的な状況が来るまでは寝ていれはいいのと言へばそうではなくて、やはり日常活動の積み上げ、例えば先程三千部の新聞の話も出ましたし、狭山闘争の話も出ましたし、身障者の運動の話も出ましたけれど、そういうたいろいろ運動が積み上げられていつてゐる。しかし、弁証法を持ち出すつもりはありませんけど、その代数和で同心円的に、ということではないと思ふますよ。ですが、そういう日常の営みがあるという基礎的な状況の中で、飛躍的な發展というのもおこるんだらう。これは、基調発言の言い方を借りれば「夢」ということになるんでし

ようか、やはりそういう夢を私は狭い経験の範囲からでも持ち続けている。おめでたいと言われるかもしれませんが、私としてはそういう面があるわけです。

□ 学生と運動

D 今の廣松先生のお話の中で少しわからないところがあるんです。マルクス・エンゲルスのテーゼに「いつの時代においても支配階級の思想こそが支配的な思想である」というのがあるわけです。そういうようなテーゼがありながら、なおかつ運動が盛り上がりつつくるというのはどういふことなのか、ぼくにはよくわかりません。

それから、大学の先生なんか教えるいわゆる実証主義的な学問というのは広い意味でイデオロギーなんじゃないか、だから、ぼくらが毎日大学に通つてゐることも何かイデオロギーをつめこまれてゐるんじゃないかという気がするんですけども。

廣松 確かに実証主義と言つても一つのイデオロギーだと思ひます。それからマルクス・エンゲルスの有名な「いつの時代においても支配階級の思想こそが支配的な思想である」これも私は、その通りだと思ひます。それにもかかわらず、何故一定のドラステックな変化がおこりうるのか。これは例えばの話ですが、江戸時代なら江戸時代に四民平等を言つて、士農工商の身分制度なんかは不合理だ

と言ったら、おそらく被支配階級の人の方が
四民平等なんてとんでもない、と言う事は、
ある時期まで続いたと思うんですね。それか
ら「忠臣蔵」なんて言うのは、まさに武士の
イデオロギーでしょ。これを一番熱狂して見
たのは誰かというと、必ずしも武士ではない。
それ以外の階級の人だった、そういう状況が
あった。そういうこともありまして、最初に
個人の次元でみなさんが議論され、みんなが
共通の基盤というのをいわれたのに対して
「結社」ということを敢えていったのは、そ
ういう意味から、小数の「結社」といっ
は標準的なものに引きずられながらも、多
くはみ出る、そういう人たちの「結社」とい
うものがあり得る。で、今度はそういう「結
社」というものが一定の組織方針を持ち、戦
略戦術を以って、全体の運動、思想状況にコ
ミットしてゆくという事を通じて、初めて変
化ということがおこりうるだろう。その点、
近代のなる解事項としては、民主主義の多数
決原理がまさにその典型だと思ふんですね。
みんな平等で基本的に同型である、理性的な
存在であるから、討論して話を詰めさえすれ
ば意見が一致するはずだ。それで、その多数
の意見に依ってやりましようということなん
だ。これはもう、まさに近代のヘンクワリン
なイデオロギーがあつて、で、そういう枠を
とっぱずしていくためにも、普通の既成の組
織、既成のシステムの中でどう変革してゆく

か、ということではすまないだろう。そこで
非席にラディカルな結社なり前衛組織なり、
そこの戦略・戦術なりの話が出てくるんだ
と思います。

K 先生の話が革命論の方に大きく展望
が開かれたところですが、その中で我々学生
はいかにどうしていかか。例えば、先生も非
難しておられる某政党、某団体によれば、そ
ういったことの主体は労働者にあつて、学生
はその随伴者ということになりますね。
我々学生がそういう状況をつかみうるのか
ということには非常に不安をもちます。
学生の果たす役割としては、先生がさっきあ
げられたフントにおいては、学生こそ前衛に
あり得るとしている。我々は実際にそういう
ふうによりうるのか、我々は実際にどうい
うふうにやればいいのか、ということについて
先生のお考えを聞きたいと思ひますが。
廣松 学生前衛論というのは、ごく一時期
に変な形で出て来ましたけれど、これは本当
に例外的なことだったと思ふんですが、私共は、
層としての学生運動、これが同盟軍たりうる
んだという同盟軍規定までしかやっておりま
せん。そして学生層が層として同盟軍たりう
るといふ議論そのものがマルクス主義の階層
論、運動論の中では非常に、異端的、例外的
な議論だったわけですね。マルクスからカウ
ツキーのあたりの議論からすれば、個々人と
してプロレタリアートの陣営に参加すること

はありえても、基本的には支配階級の側に属
するし、せいぜい好意的中立を保たせるのが
関の山だということだったのに対して、私共
は戦後日本の社会構造的な分析、あるいは、社
会階層的な分析の中から、層としての学生
運動が可能であり、かつ同盟軍たりうるとい
うような規定をしたわけですね。ですが、それ
は日米関係が今とは違つたような状況の中か
ら出てきた議論なので、今は、もう少し別の
形で検討されなければならぬだろう。その
場面で、指摘されるとうり昔の層としての同
盟軍規定のようなことは今は簡単には言えな
いだろう。と思つております。しかし、これ
を今、どう考えているかということについて
は、私は最終的な結論を持っていないので、
一言では言えないので、今日のところは御勘
弁下さい。

読者から社長Kに贈
られた、熱い愛の告白
(P50 下段五行目以下参照)



感性の鈍磨と運動論の欠如

今回の討論会は、主催者の私達にとつては、予期せぬ形での一応の成功と言えそうに思う。それでは、何が予期せぬことだったのかと言つと、最初今回のシンポジウムを企画した時、私達のうちに漠然とあつた期待は、今のこの状況をいかに打ち破ることができるか、その端緒を

よいから出てきてほしい、というところだった。又、その中に押かれてゐる私達の状態、それを見つめ直さうという意味で、日頃黙々と大学に通つてゐる人から一言でも、発言がほしかつた。当初の予想では、会場からの発言はあまりないのではないが、そもそも人か来るのかなあという心配の方が強かつたのですか、愚かな我々の考えていた以上に、廣松先生のネームバリエーは絶大で、かなり意識をもつた方々が集まつて下さつたようです。

そのせいか、司會の非力もあつて、会場からの発言に左倒され、語はアツと言つ間に、全共闘の語、そしてついに革

命論にまで及んでしまい、初め考えていた日常生活の中から状況を撃つような発言はあまりなかつた様に思う。だからといって、未来に対する展望が開かれたかという点、これもバツとしたものか出てこない。もちろん今の状況の中では当然かえりきれないか。

景になつたのは、発言の内容に、それほど新鮮な点を感じられなかつた事だろうが、つまり発言の内容はほとんど、この数年來、運動を何らかの形になつて来た人達によつて語られてきたことの中に思えたのだ。それは自らの世界に近い所から出發するという承擔であり、小情況にこそ、自らの血となる運動が展開出来るという考え方である。これは私達が「恒河沙」を通して訴えかけてきた、「文化」と通じる事だといえよう。しかし、現貌を變革していくには、それだけの武器ではすぐに限界が見えて来ていると思つた。

廣松先生もあつしやつていたが、やは

り大情況をどうえ返すだけの運動論が必要とされてゐるのではないか。

こう言つと、何か観念的にはかり言つてゐるように聞こえるかも知れない。でもそれだけ「恒河沙」を見てもうればわかる通り、私達としては、身近な世界から出發しなから、現実に対してコミットしてゐるつもりである。この観念的というのも、議論を聞いて感じてきた事の一つだ。みんな、自分に身近なもの、切実なもの、とか、自己という言葉をやめたから、いつこうに自分の奥体験に基づいて語りたい。何人かの人か奥体験を語つたのは、非常に説得力があつたし、やはり日常の中から非日常性をつかみ出して行くだけの感性を磨きあげていかなければならぬと思う。

やはり現在要求されてゐるのは、集まる事、集める事だと思ふ。人も、声も、70年代は眼りの時代だつたと思ふ。個人も組織も、自らの内に叩きつけて力を先方につくつたのではないだろうか。

社会に絶望しなから、人間は社会に寄つてしか生きられない。それならいつぞ開き直つて、社会に「夢」を託した方がいい。今、新たな社会を自拓して。

サークル 自己紹介

応援部

山岸智子

我が応援部の正式名は東京大学運動会応援部、六大学野球リーグ戦の応援を主に活動しており、部員は40名余(女子11名)でリーグ・バンド、バトンに分かれています。

「えっ応援団にいるの?」とよく驚かれます。へ嗚呼花の応援団Vなる漫画のおかげで私達応援部員は何か特筆すべき、異次元に棲む集団の如く言われます。(この文の依頼もそこにあるようですが……)確かに我が応援部も、へ硬派・猛者・酒もVの連想、旧制高校風とでもいうのでしょうか、その様な性格もある面では受け継いでいます。しかし応援部員とてたの学生、また、4年前から女子部員も入るようになり、私達はへ応援団Vのイメージとはもとより異なる、そしてかつての東大応援部とも違う新しいものになりつつあります。この点、部内でも過渡期とも言われて微妙にゆれ動いているのです。

「バトンがールだってね、ミニスカートはいてるの?」世の中の人々の最大の関心事(へ)は女子東大生(へ東大看護学校生も含めて)がチャラチャラした態度で年令も足の太さも省みず人前に立つ事にあるようです。試合を盛り上げるより和やかに楽しい雰囲気を生む為にチャガールの存在は望ましいものと思います。そしてチャガールはやはり男子部員でなくてはいけません。ポンポン、バトンの振りつけに工夫を凝らし、笑顔を忘れぬように(この為に結構努力もいるのです)その上快活さが表現できて活動的なコスチュームといえはスカートやジヨギングパンツが良いとなっています。こう言ったところごん々の興味の的になるのは避けられませんが軽蔑だけは免がれたいと思いますから。

学ラン等でリーグやバンドにも変わった関心が寄せられていますが、私はよくわからないので省かさせていただきます。

「応援したところで野球部が勝つわけなし、もの好きだね」ともよく言われます。確かに私達がどんなに応援したって勝敗は選手が決めるのですからおほらしいと言えばそれまでです。しかし、では何故この世に応援があるのでしょうか? 東大の応援に来ない方でもプロ野球なり何なりの試合を御覧になっていらないと思います。トトカ儿チヨでもない限り観戦したところご何の得にもならないのに。うまく説明できないのですが、私達はへ勝敗Vという地平の彼方に何か理想のようなものを見ているようです。部内では、良い応援Vとか「気合」とかいう言葉がよく使われますが、私達の行きつくべきところ、およそ合理的な説明のつかぬ上下関係とか礼儀・厳格と放蕩の裏あわせ、が集約される場所、それを求めているように私には思えます。私の勝手な考えを言っしまいましたからつけ加えますと、私は応援が好きです。試合という筋書きのないドラマ、そこに選手と一緒にあって、あるいは緊張し、あるいは歓喜を破裂させ一つ一つの動きを追って呼吸しているような、グラウンドと応援席の結びつきが好きなのです。オリンピックがあるときに「がんばれ日本」になり、高校野球になると思わず出身地の高校の勝敗に目がゆく、試合とは不思議なものごとす。神宮球場において、早慶戦の賑い、明治、法政の大勢、この熱心な声援をうらやましく思います。一人をこす東大生の輪(へそして和)をつくる為にとまで大風呂敷は広げませんが、せめて春と秋に一度くらい、天気の良い日は青空の下で「フレイ、フレイ、東大」もいいではありませんか。

追記…部の創立以来野球の応援を第一にしているの、他の応援は行けなかったり、行ってほしいして良い応援ができず、残念です。今後なんとかしたいと思っています、今のところは許して下さい。

〔養道〕



時代錯誤家

あゝ夢のカリフォルニア

(小生、普段は沈着冷静、温和柔順をもって知られる礼儀正しい一狸でございますが、今回駒祭に思う所あり、且つ風邪の為咽喉が痛みまして気嫌が悪いために特別に毒舌をふるうことに致しました。御了承下さい。)

——シビアな所を見なきやダメだよ、夢のカリフォルニアはもうだめぬ。

これは駒祭最終日、白竜コンサートでの彼のメッセージだがまことにその通り。(白竜はいい男^{ギャツ}でしたよ)

なんだよあの駒祭は。企画教が史上最高とか言ってたけどいくらクズが増えたっつてどうしようもないんだよ。

まず店用いて呼びこみやつたあんたがたへ。確かに面白いしそれなりの意味があるのは認めるよ、でもさ恥ずかしくないのかねえれだけしかないっつてことがさ。高校生の女の子を教人で取り囲んで、

「トイダイ生のエリート意識」丸出しの感じで「ねえ寄ってかない」

或いは、舐しエエの某クラスではクラスに女の子が3人いるのにもかかわらず売上げを伸ばすために女子大の女の子を呼んでこようという話がマジメに出たんだらうな。一体クラス企画の意味をどう考

えんのかね。

それとこれはほんとにアホかと思ったよ。図書館でやってた、女の子の写真を無断で撮ってしかもコンテラストまでやってた企画。或いはビニーティフルギャルとかいって写真を屋外に貼り出した企画。

一体何のためにやってるのかね。

そう、金をもうけるため或いは美人ちゃんつかまえるためだよな、わかっているよ。それにしても、

あんたがた駒祭にたつたそれだけのことしかできなかつたのかい。

例えば正門の前に居座ってたパトカーとあのムサクルシイ色した送迎バス。そしてベタベタポスター貼りまくってゴミを出しまくって、結局片づけはKFCとか校内のおじさんおばさんにやらせてしまった企画。この2つは駒祭の象徴だった。ゴミも自分で処理できない奴が自立できるはずがない。(時代錯誤社も！)

そう、要するに駒祭は今の我々の状況を肥大してみせただけの話だ。パトカーの常駐にどうこう言える身分じゃないんだ、まさに駒場は、そして我々はパトカーに守られて成り立っているんだからな。そしてその中にいるのはヤキソバとクレープを売るのがびとした坊っちゃん嬢ちゃんたち。

解放派の青いヘルメットに生理的嫌悪感を持つだけで、彼らのここにいる意味を考えてみようともしない。雑踏と広さのおかげで、どこかに内ゲバがあったらどうだと伝え聞いてもまるでカンボジアかどっかのどきどきのように遠い。ただあんなヘルメットなんかかぶる目障りな連中を早くどっかに消えてくれればいいのにと漠然と思う。

(パトカーが何故いるのかといえば、彼らパトカーは、若い奴らが要するに根本的にコワイのだ。ヘルメットをつけていようがいまいが、ジーパンはいていようがいまいが、そんなことは関係ない。ただ若い奴らが集まって一つの目標を見る時を、ほとんど本能的に怖れているのだ。

だが怖くもなんともないことは我々自身が知っている。何故なら我々若い奴自身が、若い奴ら^を怖れているのだから。我々はパトカーに守られて天真ランマンに老いている。)

カネも女の子も、そういった陳腐な夢のカリフォルニアはすぐに流れてゆくさ。その時、あんた自身が流れて去るのかそれともふみとどまるかは、あんた自身が決めるしかない。

【理】

おかげさまで恒河沙も満一才となりました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。今回見田先生に一文を寄せていただきました。

時代錯誤的考察 見田宗介

仕事と約束はさやさないということを上上のモットーとするべく恒河沙に「なにか一言」かくことを約束してしまつたのは、たのみにまた学生たちの感じかよかつたことのほかに、「時代錯誤社」という発行元のなまえが氣にいゝたからだ。

ゼミ合宿での発行者たちのつれづれはこの雑誌はその社名にふさわしく、やはり売れず、空室あたりで廢刊になるかもしれないという。(執筆予定者のまえでそんなうわさをする編集者もいないものだ。)

みせてもらった6号と7号の企画と記事は、ほとんどの好きなマジメ的・ファミリア路線(本質はマジメで表現はファミリア)をなかなかよくいゝてゐるから、時代の方が悪くて売れないのだということにしゝあこが。売れないことがひとつの栄光であるといふだけの紙面の質をつくることか大切だと思つ。時の流れにのまうとしてこの流れにけいばじめだが、時の流れに無頓着に立、こゝには、時は必ずやってくるものだ。ということか、幾人かの人の仕事やいくつかのグループの歴史をみてゐて、ほとんどの思ふことだ。毎号が二回は最終号となるというつもりで十部も出さつづけたく(日ツアラトウストラ)の第四部は初版7部だけです。それかいつのまにか半年にもなる。という歴史かいはばんすてきた。

「書くめえ左派委員長」とかによる(少しちがうが品性アップのた

めこつ書いておく)

「編集部注・カット内原稿のまま

【編集部注・原稿は拙くめえ左派である一本第7号30頁参照】
著書時特選があつたので、時代錯誤的著書等をひとつ紹介してあげ、ちようど二昔まえの、バリケードとなつていた七本の中で、いましく巨大な著書の中にもまじつてこつこつとつづつて書きつけてあつた二篇。

よつて来もせぬすめを追つて

日かぬいちにちくらしてたい

すずめかわいや ほうやれほ

わか身かわいや ほういの ほうい

アナクロニズムとはいふまでもなく、時間を示すterminosに否定の接頭語を付したもので、無時間性といふことかむんらんの意味です。

近代人の強迫観念である「目新しさ」を追いつづけることからの解放。時間の外に立つ世界。子供と愛と夢との時間(表紙の絵?)。アバクロニズム、時の流れの氷底に立つことによる永遠。

(書くめえ右派全国委員長)
(兼・教養学部教官・社会学)

恒河沙一周年

記念作文集

時代錯誤社はオリジナルメンバー4人から始まって現社員は11人(うち1人は休職中、1人は入りたてのホヤホヤ)がおります。今回はその内から何人かの記念作文を載せさせていただきます。

何が好きでこんな……今時代錯誤社は社のサイフを前にして言葉もない。かっ金が無い。マジに金はゼロ(、)なのである。貯金は別田あるという。倉庫には山のような在庫がある。今、午前12時15分徹夜の真最中。この状態で9号を出そうってんだからねえ。

「俺は値上げには反対だからね。値上げする位なら俺が自腹を切る」と労組委員長。「俺達はもうけの為にやっこんじやない。売れないから値段を上げるっていうのは思い上がりだ。」

「でもなあ、続けて発行するってことがなあ……」
悲哀に満ちた瞳の社長K。老いた骨にム手打つ(その名も、じいさん)という)取締役G。辛口日本盛のびんは2本目が空になってしまった。ゆびしさが身にしみろ。

労組委員長はその余りの理想主義(?)のため或いはそのアルコール主義のために妻子に逃げられ、社長Kは何故か様々な仕事に追われ生活の重圧のために実年齢より10才は長じて見え、某女子社員は「イローゼのためか社長Kに叱責される愚痴に悩まされ、或いはある有能な男子社員は、ドツボが昇じ、ただ今休職の身であるのだ、個人個人を見れば悲惨な状況は山積している……ううう……」
はっしかしこんなことを書くとなんか新入社員が来なくなってしまう。ぞは一転してバラ色の時代錯誤社の生活を書こう。

今時代錯誤社は社のサイフを前にして言葉もない。もちろん金はない。しかしそれがなんだというのだろう。この我々の沈黙は、金が無ければ無いただ燃え上がってくる熱い思いのあかしなのである。この根無し草の現状、流れるならば流れるままにいくらでもなれる現状、或いはシラケの時代において、仲間がいるということ或いは何かをやっているということ。バラ色とは自足し安定するふやけた色なのではなく、動いているその中に輝く色なのであるのである。(今金も暇もあるあなたよ、君は今満足しているか。) 風休み、買っ下さる人々と持するのはとても嬉しいのです。

今一時刻分。まだまだ時代錯誤社は元氣一杯である。日本盛の代わりにネスカフェとキリンオレンジがやって来た。さーてがんばるべえ。

【狸】

恒河沙の編集に加わったのが、確か五月祭の数日あったと思ふ。それから5、6、7、8と来て今回が9号となった。何かうやむやのうちですごいて、た一年の時の反省は、何かをやらねばという気持ちを生じさせて自分を苦しめた。やらねばならないという事はわかりきっている。何をやるかもわからないし、そして、何となく、頭の考えとは全く逆に、やる気がおきないという感じが、しつかり腹の中にいすわっているというこまった状態であった。そんな時にあったのが「恒河沙」というミニコミ誌で、「

何かはあるだろう」といった感じで入った。

僕は察して察察もやっているので、いろいろな察の人間とくだわりなく話せるようになっていたが、その話をした人たちもみな、それなりの悩みはもっており、それなり自分が感じている壁みたいなものはもっていた。みんな決して「いい天気だな」という感じ（ワカルカナ）ではない。自治会やセクトの人間の言う勇ましい事はどうもピント来ない。このみんなが大なり小なりかかえているドツボを語り合う中から一つのものが生まれて来たなら、それこそ本当に強いものになると思う。論争の為の論理からは空しい念仏しか生まれてこないと思う。（決して理論を全否定するのではない）大なるエネルギーを内に秘めてそれに方向性を与えられずにいるのが、今の自分たちの状況なのではないのか。この方向性はみんなの話しの中から生れてきてほしい。こんな考えも僕が「恒河沙」に入った一つの理由になっている。

もう一つ直捷的なきっかけとなったのは、友だちにみせてもらった「なりた」という月一回の4ページほどの小さな新聞をみたことである。これには本当に感心したとしかいいようがなかった。「なりた」新聞は、成田市で農業をやっている青年たちが、農作業を終えたあと集まって、月一度地域の新聞をつくっているのである。うまく伝えることはできないが、とにかく、その「なりた」新聞には生活と労働の上に立つたくましさ、その中でもなお新たなものを求める姿勢があった。日常に埋没することがない。かえって「生活の中から創造」という、僕が勝手に考えた言葉で表わせると思う。恒河沙という雑誌が「なりた」みたいになつたら、ほんとに「すごい」と思う。（説明不能コメン）

現在の恒河沙にはまだまだ不満が残っている。「本当にいい雑誌だから10円で買ってくれ」とはまだ言えない。銀杏並木ですれ違ふ「他人」とも話をすれば通じるのである。「話し」は個人の間から駒場全体までレベルはいろいろあるが、自分たち若者の間で「話し

」ができるようになったら、しかも「なりた」みたいな「生活の中からの創造」を求めるような「話し」ができるようになったらすごいと思う。恒河沙もみんなでその一担をこなせるようにできたら最高だと思う。

「恒河沙」が創刊されて一年がたった。といっても創刊時からのメンバーではないから、創刊一周年ということでの感慨などはないしかし、たとえそれが自分にとって形式的なものにすぎないにせよ、やはり一つの区切りであるにはちがいない。そう考えれば、自分がメンバーに加わったときのことなどいろいろなことが思い出される。「恒河沙」に参加した動機といえば、唯、妙に少女趣味的な感傷にひたろうとしていた自分を、まぎらわすためであった。したがって、恒河沙」である必然性は全くなかったのである。現メンバーの中では参加の動機が最も弱いかもしれない。しかし、当時、なんといつても、じっくり話し合うことのできる仲間が欲しかったのである。ひととのコミュニケーションを求めていたのだ。ひととのコミュニケーションを求める、まさに「恒河沙」のめざすところじゃないか。とすれば、まんざら的是はずれをやった訳でもなかったようだ。

【寒】

思えば、僕の時代錯誤社での初仕事と言えば、トラメガを手にし、銀杏並木で「御通行中のみなさん、こちらは恒河沙（当時は「月刊恒河沙」ではなかった）でお馴染みの時代錯誤社です」と叫ぶことであった。あれ以来、素面なのに公衆の面前であれだけ大声を張り上げられることが一つの楽しみになっている。それにしても初めて「恒河沙」と叫んだのは四月の末のことだから、それからもう4ヶ月を越える月日が経っている。その間、偶然に互いに見知らぬ七千の人間が集まった駒場の「コミュニケーション」という、夢としか思えない課題の意味を考えつつも、とにかく次の号を出すという目の

前の課題に縛られ、それに加えて労働組合の結成などもあり、忙しさに埋没せざるをえない毎日であった。そのため、個人的に悩むべきことも悩まずにすませることも多く（ふられた時だっただろう）、当然五月病なども存在しなかった。立ち止まって考えることの少ない日々だった。今は、とにかく全ての仕事をやめて、いろいろ考えてみたい。個人的な問題も、またコミニケーションという時代錯誤社のあまりに大きな課題についても、じっくりと考えてみたい。しかし、行動の中からしかまとまな思考は生まれにくいという経験的事実を思いおこすと、ここぞ立ち止まるわけにはいかない。とにかく恒河沙によって駒場にコミニケーションをつくり出していく中で、コミニケーションというものを考えていくしかあるまい。僕が駒場を去る日まで、いや、恒河沙の廃刊の日まで、僕は恒河沙にしがみついていくつもりである。

【塚】

早いもので、私が、時代錯誤社に足を引っこんで8ヶ月、恒河沙も一周年を越えることができたがオリジナルメンバーである2年生4人の感慨はひとしおであろう。

あっさり曝露してしまうが私は他のメンバーのように恒河沙の内幕に、ホレ込んで入ったわけではない。寂しかったからであり、何かともかく始めないとこの混乱からは抜け出せないと思ったから。そこでまたま手近なところに恒河沙があったというだけの話である。最初の頃は、なんでもこんなコムツカシイことばが載せられたら、もっとミハーっほく楽しくやればいいのに、と思っていた。次にきたのは新たな混乱とオチコミで、ビビりしてみんなこんな文章かけるのだから、と文章を書いておくとくるといっただけで畏敬の念を抱いてしまう、というありさまで、話し合いをして一言も言えず、話の展開を見守るばかりだった。今でも文章コンプレックス、理論的な思考コンプレックスは根強く残っているが、最近は何となく直ってきて訳のわからない文章は、こんなんわ、かんない、と

表現している。ひと頃、カットをかいいたり、サークルの向を走り回ったりという技術的(?)面へのみ楽しみを見出すことがあったが、せっかくこういう雑誌に参加しながらそれではあまりにつまらない。お次は自分にとって恒河沙とは何か?という問題である。ひところ恒河沙の内容が、東大改革とかいう方向にこだわりすぎ、それが今自分が実感として促えうる問題とあまりにかけ離れた所にあるように感じていた。もちろん私のように危機感をもたないでもないけど、その危機はどうせ、我が亡き後、にくるだろーからライイ的な人がいるからこころ、こだわり、つづけることは必要なのだけど、恒河沙の内容が自身も、いろいろな目でいろいろな物事をとらえようという方向に変わってきたというおかげもあるが、雑誌、特にミニコミのようなものをやっていたには雑誌のことに専心する雑誌バカではなくて、編集者自身がいろいろなことに頭をつっこみ広い視野をもたねば、というわかりきったことを本當にわかったのはつい最近である。

最後に、私の「家族」は本當にオモロイ人間はっかである。この人間関係がなかったら私はとっくの昔にやめてただろう。試験が近づくと仕事をさぼりたがるいわゆる「一般学生」である私は、専門の勉強やバイトのあい間をぬって仕事をし、なおかつ忙中閑でお酒をのむ人たちのバイタリティにただ感心するのみである。しっかりと約束の時間におくれるクセまで与えてくれた恒河沙とこれから先、どのようにかわかっていくか、自分でも全くわからないし、又それがなんとなく楽しくもある。

【風】

私が編集に携ったのは、五月祭で初めて恒河沙を買った後だから、実質的には六ヶ月しかこの雑誌との関わりをもっていない。一度雑誌編集というものをやってみたいという安易な気持ちで飛びこんではみたものの、この頃は、月刊紙一つ出すことでも随分たいへんだという実感を味わい続けている。

編集に携わる上での私自身に対するメリットとデメリットを述べてみたい。まず、メリットとしては、個性溢れるスタッフの面々と面識をもつことができたということ。私は常に彼らの精力的な行動に溜息が出るほど感心している。社長K氏など、手帳にはタイムテーブルがぎっしり詰め込まれていて、これでよく正常に生きていられるものだと感じるほどだ。私にはとてもまねできない。それにK女史には女性として学ぶべき点が多い。夏休みの合宿なども、K女史がいたから一応まとまりのつくものになったのと思う。また、編集集に關しての話し合い(テーマと懸け離れた話に脱線することがしばしばだが)では、各々ができるだけ納得がゆくまで理解し合おうと努力している。この場では私の知らない分野で話が進められることも多く、私は傍観者たらざるを得ないのだが、耳学問にせよ、得られることは多く、わりと有意義だと思う。(わりとというのは無意味と思われる時間の浪費も見逃せないから)それに、皆、心が広い優しい。誤ちを犯したり、エゴを押し通したりしても、陰険に咎められることなど勿論ないし、明るく楽しく、ことが円滑に運ぶように、皆、気を使っている。(右、そんなことを気にする必要などない人たちの集まりになっているとい、た方がよいかもしれない。)

私にとってのデメリットは、何といつても時間を奪われることだろう。皆忙しい人たちだから、共通にあっていてる時間をとることが難しく、話し合いは夜から、ということもよくある。下宿暮らしの私としては、下宿のオバサンの手前、やはり夜は早く帰っていななければならない。甘いかもしれないが、やはり女の子なのだから、そこは何とかして欲しいというのが本音だ。駒祭前に限らず、日曜日も何度が潰した。その時は、本当に自由な自分だけの時間が欲しいと思った。時間に追われている自分が、だんだん精神の貧困な人間になってゆくように思われた。短時間にパッパッと手際よく仕事を片付けることの苦手な私には、人一倍時間が必要なかもしれない。

勝手なことを述べてきたが、いずれにせよ、この半年は私にとってプラスだった。目下、時代錯誤社を襲う最大の危機は資金難、財政悪化ということだろう。売れ行きがはかばかしくないのだ。千円二千円、という容赦ない？搾取は、もうよしまししょうよね、社長さん。読者諸氏よ！平社員のこの悲痛な叫びを聞いてや、てください。時代錯誤社を救うのは、あなたがたひとりひとりの百六十円なのです。恒河沙編集部の意図と編集方針、さらには編集過程に費やされる莫大なエネルギーを考えてくだされば、嗚呼、百六十円とは何と安いことか。

【佳】

先行きなんかまるでわからないままに「恒河沙」を出し始めて、気がついてみたらもう一年。よもやなるまいと思っていたのに今はちゃんとオフセット印刷で、しかも月刊。ふり返ってみるとこの一年は自分の生活が恒河沙一色に染まっていた様な気がする。(そのくせ、メ切向ざわになるといつも、え？まだ何もやってないの、このと編集部の非難を一身に浴びているのだ)しかし、一年ただ経っただけではまだ何の意味もない。三年、五年のとなると、一応の伝説みたいなものもできるし、ぶっつぶれる心配も少なくなるのだが。かえってマンネリ化の方が目立っているようぞ心配になってしまふ。原点である、駒場のコミュニケーションの復活の為には、もっと、読者一人一人を、そ、う、あ、な、た、の、声、が、誌、上、に、届、い、て、ほ、しい。ぜひみなさんの声を寄せて下さい。どんな事でも、まるで無内容でもかまわないのです。お願い。ぬ。

【邑】

恒河沙は目新しかった。希望の火だった。今、日常の中に溶け込もうとしているから、みんなががんばってもう一度輝ける日の丸としなければならぬ。さあゆこう。(談)

【龍】

ミニコミの隆盛がマスコミ誌上で騒がれ出したのときを同じくして、恒河沙が誕生した。それから一年、誕生当時の不定期刊行物、原始的生産様式の域を脱け出し、一人歩きを始めた感さえする。と同時に、それなりの責任を持たざるをえなくなつたと思われる。今は一読者として、恒河沙がマンネリ化し存続していることに異議があるなどと言われることのないよう一層の内容の充実を期待して見ます。(談)

コートにマフラーといういでたちで登場したカバールも満一歳の誕生日を迎えました。読者諸氏に感謝。恒河沙がさらに駒場に深い根をほることができまますように。ところで悲しいお話を一つ。一年間みなさんに愛されていた(?)カバールも一周年を機に引退です。新しい表紙をどーぞよろしゅう。(談)

へエー、もう一年も経ったのか、というのが奥感である。「一周年」ということについては、特に感慨はない。(なーんちゃって、エエカツコシイ気味のセリフですな。でもウソじゃないス)いや、小生は元来センチな面を強く持っており(ウソつけ、どのツラぶらさげで言っただ、なんていう声かとび出しそうです)が、これもまんならウソじゃないスヨ)感慨にひたろうと思えばいくらでもひたれるので多少自戒しているのかもしれない。だが、まあそんなことはどうでもいい。恒河沙をやってきて感じたことをちょっとばかし書こう。それはつづめて言えば対話のなずかしさでもいうことになろうか。対話ということがそれほどカンタンにできるものでないことは、小生の短い人生経験(そうだ！俺の人生経験なんて短いんだ。俺は若いのだ。「実年齢より10才は長じて見よ」とはなんたる中傷！この紅顔の美少年にむかっ、て！)からもわかないわけではない。ましてや、そこに文章表現の限界だの、編集能力のなさだのが入ってくれば、これはホイホイといくものでないことは明らかで

ある。でも、一年やってきて、改めてその難しさを感じたことは否めない。とはいっても、対話そのものの難しさの前にためいきをつく以前にやることはいくらでもある。今は売れ残りの山はあまりに高いが、読んでくれる人はしっかりいるし、クロスワードから大作まで何らかの形で声を送ってきてくれる人もちゃんといえるおかげで、どうにか一年続いたわけだ。仕事のマンネリ化をのりこえて少しづつでも読面の充実をはかりたい。みんな、何か送ってくれ。(酔)

×アピール×

☆ 学内における自由を守ろう!

☆ 解放派・革マル派、すべての東大生、教官、職員は、自らの人間性に基づき、秩序を回復しよう!

☆ 学外の権力介入を回避しよう!

☆ 恒河沙 一周年記念 方圓募金断固達成!

時代錯誤社有志、代表 緒村 肇威

☆
☆
☆

前人魚のうた

稗沙

人魚のうた

I

私が魚になれなかったのは
出会いの前日のヴァカンスのせいだ
とげのない網
魚の白い腹

ぽといつく水草

疲れ果てた人魚の首

を団体旅行帰りのじいさんが
珍しげにながめている

それから 二ヶ月たって

二度目の行程は速い

ヒトになることをためらいつつ
うろこを 一枚ずつ

一枚ずつ……

青白い月の光に照らされて
心と

笛を吹く手を休める

水彩画の人魚

「人魚……シッポ……」

アシ……ヒト……」

深い深い血の海を泳ぎ渡って

たどりつくはずのエデンの園に

人魚の白い想いが漂う

もはや人魚であることを
欲しない

すかに声は枯れ

うろこも少しつやを失って

そろそろ泳ぐことに疲れってしまった。

ここちよい夏の海も

終わった

ひとりの夜に降りそそぐ

雨の冷たさに

波はシッポを凍らせる

太陽と戯れることも

ただのなぐさみ

長くなってゆく夜の暗さに。

一生漂いつづけるのは

いつか浜辺に

腐らした身がうちあげられ

それでおしまいなのだ

すでに鋭いナイフで切りつけるすべを
知ってしまったのは

怠惰と

偽善のもの憂さなのだ

もつしばらく

ひとりで月をながめよう

それから緑の髪を切り

力の限り泳いで
そこで静かに目を閉じよう
血の接吻に 私は
ヒト

になろう

そこへ

もの知り気なオバサンが

「眠っては凍え死ぬめのですよ」

とか ささやく

目を泣き脹らした人の背中に

秋の鈴の鳴るのを聞く

巡礼の白い衣

やみを飲み干すグラスに

飲み干せない足音が

長く長く続く

その背中也見送って

無言の無言のクラクション

追おうとする上り坂に

強く引力が からだを縛る

II

或いは胸のあたりに

気配を感じたかつて

子宮がみだりに動めく

酒びたりの夜に 欲情が

かたまりになって 吹きあげる

「何て太い足」

ついこの間 尻尾から変わったばかりの足の

太さは現世の重みをしょいこみすぎたせいで
と気どってみる

何のことはない

地を踏みしめるほど足は太くなり

その時

かすかな 尻尾の残りの骨が

身を空虚にする

昨日、真であつた欲情も

地に足を踏みしめた女たちの会話も

ただ胃を痛めつける酒が

かつての坂を上るアシを呪う

それを十三夜の感傷と笑うならば

幸せな人々よ

ヒトになるとは眠ることではなかったか

言葉より先に

身を踊らせて。

豎琴を弾き、人魚は歌うが

すでに捨てた、つろこなだから

ためらいが言葉になる

言葉が知性を生む

知性は……

哀しみだ

新しいさすらいを始めたのだろうか

あくがれる月の

雲間の月の

下半身の重みに届きはせぬ。

いや

あくがれるには重い、
眠れ
眠れ

月のさすオレンジの傘の中に
星一つだにない

(54Ⅲ)

読者から

(雑誌をやっていますと何といつても一番嬉しいのが、読者の皆様からの反響、お手紙のご返事です。例えそれが身を切るような吐責であっても、いや吐責であらばこそ嬉しいのご返事です。どうぞこれからお手紙をお寄せ下さい。ここではお手紙の一部を御紹介させていただきます。)

口編集部の意図するところが何であるか良く理解できないが、共感するところがないでもない。編集部の新たな飛躍を望む。

ロいいね、こういう活動って。うらやましいなんて言いたくないけどやっぱりうらやましい気がする。思っていることをそのままぶつけてる感じ。モノをかくつていうとあたしなんかどうしても構えちゃうんだけどそういう固さがないのがとてもイイと思った。とりあげてる問題も身近なものから発しているから共感できるのも多かったし……とほめちぎったところで質問が一つ、K社長さんって本当に奥さんに逃げられちゃったんですか、かわいそうに。私、日本女子大生として、毎月買うわけにはいかないんだけど、これからも機会があったら是非講読したいと思えます。時代錯誤社の皆さん、がんばってくださいいな。

(嬉し涙が出て参ります……なお、一部に誤解が広まっているようですが、喜に逃げられたのは傍組本員長として社長Kは結婚さえもできぬわびしい独身中年男でございます。その社長Kに熱い手紙が届きました)

口Kさん愛してます♡誤もなく仕上がり、大したことでもないのに大災難に会ったように騒ぐ貴方の横顔を見ると、私、思わず火照る頬を押さえてしまうの。ごすから私、お願いですから、ごすから……賞品がくれ。

口内容に関しては、どことなくマイナー感のただよいこともあってそれが魅力でもあり何か限界にもなっているのではないのでしょうか。ともあれ、もっと多くの人に読まれることへ何ぞあんなに人通りも多いしみんな心に寂しさをかかえているのに黙って通り過ぎるのだらうね)と、それに併せてメジャーへのし上がったいくことを期待したいところ、ごす。

口毎月思うんですがよくこんな硬い雑誌が？百部も売れると。「増殖システム」だったって、いまだにわけがわからぬ。さすが駒場！(あ、東大生のエリート意識だ、そのエリート意識につけこみ売っている？マサカソナコトハアルマイ)と言いたくなる。コミニティマガジンってこんな硬いものって言いたくもなる。それにしてもボクの無知無教養のためか、言葉でさえワカランものが多くてくる。このあたり、何となく初期の雑誌の(あ、あの渋谷陽一の雑誌ごすよ)を想起させる。それで売れろんだからスバラシイんでしょうけど、やっぱり有るナー(ゴメン)

口恒河沙は、抽象的な論議が多すぎる。もっと取材活動の範囲を広げ、体験的な記事を多く取り上げるべきだ。

(ここから一層頑張りたいと思えます。それではまた……)

》私の主張《

鈴木都政に反撃を!

東C環境アセスメント条例期成同盟・静岡 秀光

駒場の半数を占める有権者の皆さん、たまには大学の外へ目を向けてみようではありませんか。全世界、全日本とはいいません、今我々が生活しているこの東京都のレベルまで。せめて、東京のレベルで社会、環境の今後を考えみていただきたいと思ひます。

四月の知事選で藤ちゃんをやぶって、アレヨ、アレヨ、という間に誕生した鈴木都政でしたが、知事就任後の政策、言動は予想を上回るひどいものであります。立川への自衛隊残留、横田基地返還訴訟の取下げに切迫扼腕した方は多かったです。一般市民には解りにくいところ、福祉行政の後退がじわじわと進みつつあります。

防衛・福祉問題等にもまして、公害行政の後退は目に余るものであります。美濃都時代、公害をメーンとしてならした田尻公害局長左遷をはじめ、公害副読本の廃止、自民党政府と一体となったNの基準の後退など、60年代後半から盛り上った反公害闘争の潮流に真ッ向から対峙する政策ばかりであります。そして極め付けは去る十月十八日の環境アセスメント条例案の撤回がありました。

御存知の方も多いと思ひますが、このアセスメント条例案は正式名を「東京都環境評価に関する条例案」といい、いわば公害を事前に防ぐための条例案であります。今までは既成の公害に対し、告発し、抗議し、賠償を求める形で進んできたのが、反公害闘争の大勢であったと思ひます。これに対し、アセスメント条例は、道路や工場の建設、新しい公共事業等が環境に与える影響を事前に評価し、公害を未然に防ごうというものであります。その意味でアセスメント条例は、反公害の側が一定の行政権を背景にしていることを前提とするわけで、60年代後半からの革新自治体運動と反公害闘争との一つの結節点ともいえるものであります。

ます。そのことは、今回撤回された条例案が77年半ばから2年近くの間、11回に及び公開審議と数多くの都民対話集会を経て練り上げられたものであることに端的にあらわれていると思ひます。

ところで、このアセスメントについて、注意しておかねばならないことは、アセスは、条例の作り方、運用のしかた、解釈のしかたによっては、建設・開発促進条例にもなりうるということです。今、鈴木知事はそのような内容を持つ条例案作成を狙って、新しく「アセス」検討委員会を発足させました。この委員会はマスコミ代表・企業シンクタンクのトップ・学者から構成され、住民団体代表は全く排除した反動的なものであります。去る十一月三十日に予定されていた一回検討会は、東京の代表的反公害団体である「日本化学クロム禍被害者の会」の追及の前に、場所を変更し、傍聴人をシャットアウトして開かれるという醜態を演じながらも開会されました。知事はこの検討会をやつり(回被害者の会の抗議行動の渦中で、一回検討会の台本がみつかるといふ事実もあったのです)、反動的条例制定の策動を今後も進めていくものと思われまます。

このような動きに対し、東京都内の反公害勢力・民主団体は、アセス美濃都案の再上程のため、直接請求署名運動に結集しつつあります。再提出のためには、都民の五十万の一、則ち二十万名の署名が必要であります。我々東C環境アセスメント条例期成同盟はこの署名運動を駒場の地に広げるため結成された自由な学庄の連合であります。我々はこの運動を単に環境の問題としてだけでなく東京都政を再び革新するための反撃の一歩ととらえ、多くの諸君の参加と協力を強く要請するものであります。

★連絡先：北京135の99210820の高橋(10じり11じ)

奇怪クワスワートパズル No.8

解答 及 当選者発表

- 1等 堂前雅史 ャマ
 2等 山崎友喜子 ャマ
 3等 安孫子勇一、上田紀行、早船一弥
 大野和彦、桶口進の ミナサマ

なお、山野善高、為ヶ井強、俣丸公明、竹村洋介、魚井貴司の皆サマも正解でしたが、厳正なる抽選の結果、上のような結果になりました。今回、何と横の20「テシオガワ」のヒントが間違っていました。天塩川は日本で2番目に長い川で、10番目は流域面積でした。

コ	マ	バ	サイ	/	ミ	テ	クレ
ウル	/	カン	リ	タイ	セイ		
カ	ク	メイ	サ	ハ	タ	/	ギ
シ	ス	コ	/	ツ	ツ	ガ	ム
ヤ	シン	カ	/	テ	シ	オ	ガ
/	ユ	/	ヨ	カン	/	ニ	ラ
ア	ギ	ヨ	ウ	コ	/	ナイ	ミ
ラ	/	コ	キ	/	ナイ	ル	/
ス	イ	シ	ヨ	ウ	/	カ	ノ
カ	イ	マ	ク	/	カ	イ	ホ
							ウ

オコルシアレ……

ヒントがまちがっていた割に何と応募者はみな正解でした。ご立派ご立派とほめてあげます。抽選でボツになった方々はきっと天中殺でしょうからお体に気をつけて下さい。

近頃、正答を送ってくる人がふえて編集部も賞品を取りに単艦マーチを聴きに行かねばならず困っています。No.9は、ちょっとだけムズカしくしましたから、ご挑戦のほどを!

発刊に際して

駒場にたすみ、ふと思う。自分は一体何なんだろう。何故ここにいるのか。駒場ってどんなところだろう。奥はこんなあたり前のことを知らないままに我々一人一人は通りすぎていく時に身を浮かべているのではないだろうか。

「自分が身を置いていく場所を直視しよう。」ここから恒河沙は出発する。駒場を見つめ、その文化をたとえわずかなものでも、自分自身の基盤として大切にし、ひいては駒場の文化を積極的に形成していこう。これが時代錯誤社に集まった我がの考えである。

もちろん、文化はそこで生活する我々一人一人が支えているものであり、決して、政治的なアジテーションや、行動によってのみ創り得るものではない。それでいて文化は、それらすべてを包摂し、溶け込ませてしまう総体として存在する。一人一人のささやかな行動、それが果は文化の最大の担い手といえるだろう。

しかし現状を考えると、一部の党派や、大きなサークルを除いて、駒場にいる個人にはコミュニケーションの手段が与えられていない。これでは充実した文化内容は維持出来ないのではないだろうか。恒河沙は駒場の文化を、ひいては、我が時代の文化を最底辺から支えるものとして、無権限、無修正を原則としてその認面を広く公開し、コミュニケーションの中から、新たな文化を建設していきたいと考えている。

(一九七九年一月)

☆正解者の中から抽選でク名様に、超豪華賞品が当たるよ。

奇怪 クロスワードパズル No.9

1	2	3	4	5	6	7	8	
9					斜線	斜線	10	
11		斜線	12	13		14	斜線	
15		16	斜線	17			18	
19			20		斜線	斜線	斜線	
	斜線	21		斜線	22	斜線	23	24
25	26				27		斜線	
斜線	28			斜線	29		30	
31			斜線	32		斜線	33	
34							斜線	

Down たて

Across よこ

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1 誰ぞ常ならむ | 1 猫に小判、豚に真珠 |
| 2 転換期 | 9 解放派 v.s カクマル |
| 3 吸血鬼 | 10 同点 |
| 4 お年頃 | 11 山本陽子のお歳暮 |
| 5 はあちゃん | 12 ちよつと関係がある |
| 6 西から登ったおひさまが月 | 15 尾ののない狼 |
| 7 酸っぱくない酢豚 | 17 ぶどう |
| 8 書きたし | 19 FFは前、FRは後 |
| 13 もめむ | 21 雷の音 |
| 14 黄楊 | 23 31文字 |
| 16 グリコアーモンドチョコ | 25 非暴力 |
| 18 頂上に積む石 | 28 キノホルム |
| *22 今道せんせのおめめ | 29 夏のビルの屋上 |
| 23 お縄 | 31 かつおぶし |
| 24 "悲劇による浄化" | 32 1848年フランス |
| 26 斜め | 33 浄土はどこ |
| 27 軽蔑された日本人 | 34 8の7時半 |
| 30 金棒に | |
| 31 10 ⁸ | |
| 32 キョーガに入ってる草 | |
| *20 球面上の幾何学 | |

宛先:

〒176 練馬区練馬 4-1-18 小山方 時代錯誤社

解答は P.55 の解答用紙に書いて、下記あてに1/5までにお送り下さい。

雨と泥にまみれた駒場祭もどうか終わった。やる人がまわった多くの人たちは、三日間、半ば理性を失いつつ駆け回り続けた後の、ある種の寂寥感みたいなものを感じただろう。しかし、それも東の間、秋も駒場を足早に通り抜けようとしている。银杏の黄色がやけに蘇やかだった。その葉も残り僅かだ。今年も暖冬と言われても、やはり季節の移り変わりは容赦ない。

駒場唯一のコミュニティマガジンとして颯爽と登場した恒河沙も、今月号で満一歳を迎える。幾多の風雪に堪え、どうにか月刊ペースを維持してきた。これもひとえに読者の皆様の熱い御支援の賜と編集部一同厚く感謝致しております。

今月号は、駒場後の雑感、反省等を、駒場祭をかり返して、でまどめ、さらに恒河沙一周年に寄せて編集部の方々が言いたい放題に意見を述べてみた。特に見田宗介先生には、多忙中にもかかわらず原稿を寄せていただき、本当にありがとうございました。

さて、駒場に話を戻すと、我々時代錯誤社でも「若者論」に異議なし?と題して廣松渉先生を迎え、フリートキキングをするという企画を催した。当日は予想以上に参加者が集まり、各人熱弁をふる

ったのだが、どうも話は我々の意図とはかなり懸け離れた方向へ行ってしまった気がする。駒場前、地獄のように延々と話し合いを続けた、あの成果は(そのカケラでもイイ)いったいどこへ行ってしまったんでしょうねえ。討論会を主催するって、ホント、難しいワ・ハツ。

ところで、時錯社の強制労働は限度を越えている。我々は一昨日から延べ三日同窓会館、北寮会議室、そしてここ明寮亀有セツルの部屋と所を変えて、昼夜兼行で九号作成に全エネルギーを傾注してきた。同窓会館では辛口日本盛を前に、鋭気に溢れていた労組委員長も、さすがに今では酒を喰らう意気もなく、目もうつろに、ロットリングを握りしめている。そこで、急ぎよ、筆者が編集後記をバトントッチされた。亜紀子とのその後を期待していた読者も多いことと思うが、筆者の拙文で勘弁願いたい。

駒場前から、気を休める暇もなく時錯に労働力を提供してきた平社員の忍耐も限界にきた。編集過程でも「もういい。断固許す!」を合言葉に?、妥協も随分してしまった。本当はもっと熟したものを出したかったのに。ウウウッ。でも、どうにか、冬休み前の発行という健気な初志は貫徹されそうです。ハア。【佳】

恒河沙 こうかしや No. 9



定価 160 yen

1979年12月12日発行 (第1刷)

編集発行：時代錯誤社

(〒176 練馬区練馬 4-1-18 小山方)



印刷所：キンショウ

ナモノ/デス/デ オ早目ニオ読ミ下サイ。乱丁落丁はお取り替えます。

1	2	3	4	5	6	7	8
9					10		
11		12		13		14	
15		16	17			18	
19			20				
	21			22	23		24
25	26				27		
	28			29		30	
31				32		33	
34							

← クロスワード
解答用紙

■ このページを切り取って、封筒に入れて下記までお送り下さい。昼休みに販売員へ直接手渡して下さっても結構です。締切りは1月15日です。
■ クロスワードには関係なく、アンケート及び裏の欄を書いて下さいませ。(しめきりなし)

アンケートにお答え下さい (裏もお願ひします)

1. 今号で良かった記事は？

- | | |
|----------------|---------------|
| 1. 駒場祭をふりかえる | 2. 駒場祭自主制作映画評 |
| 3. 「若者論」に異議なし？ | 4. 人物クローズアップ |
| 5. 恒河沙一周年記念特集 | 6. 鈴木都政に反撃を？ |
| 7. サークル自己紹介 | 8. 詩「魚のうた」 |
| | 9. コラム (時代錯誤) |

2. 何号をお読みですか

1号 2 3 4 5 6 7 8

3. 恒河沙の値段は

高い 安い 適度

4. 恒河沙の内容は

読みやすい 読みにくい

5. 今まで特に面白かった記事は ()

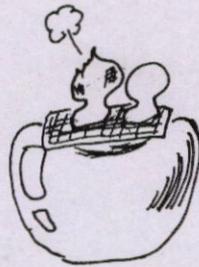
送り先: 〒176 練馬区練馬 4-1-18 小山方
時代錯誤社

時代錯誤社及び恒河沙に対する文句
や意見その他、原稿に対する反論や共感、
「おくれ & おげる」etc……何でも結構ですお返付
の事をお書き下さい。

御名前:

御住所:

(よろしくねば電話番号もお願いたします)



定価 160 ㊦